

PEEP OF DAY

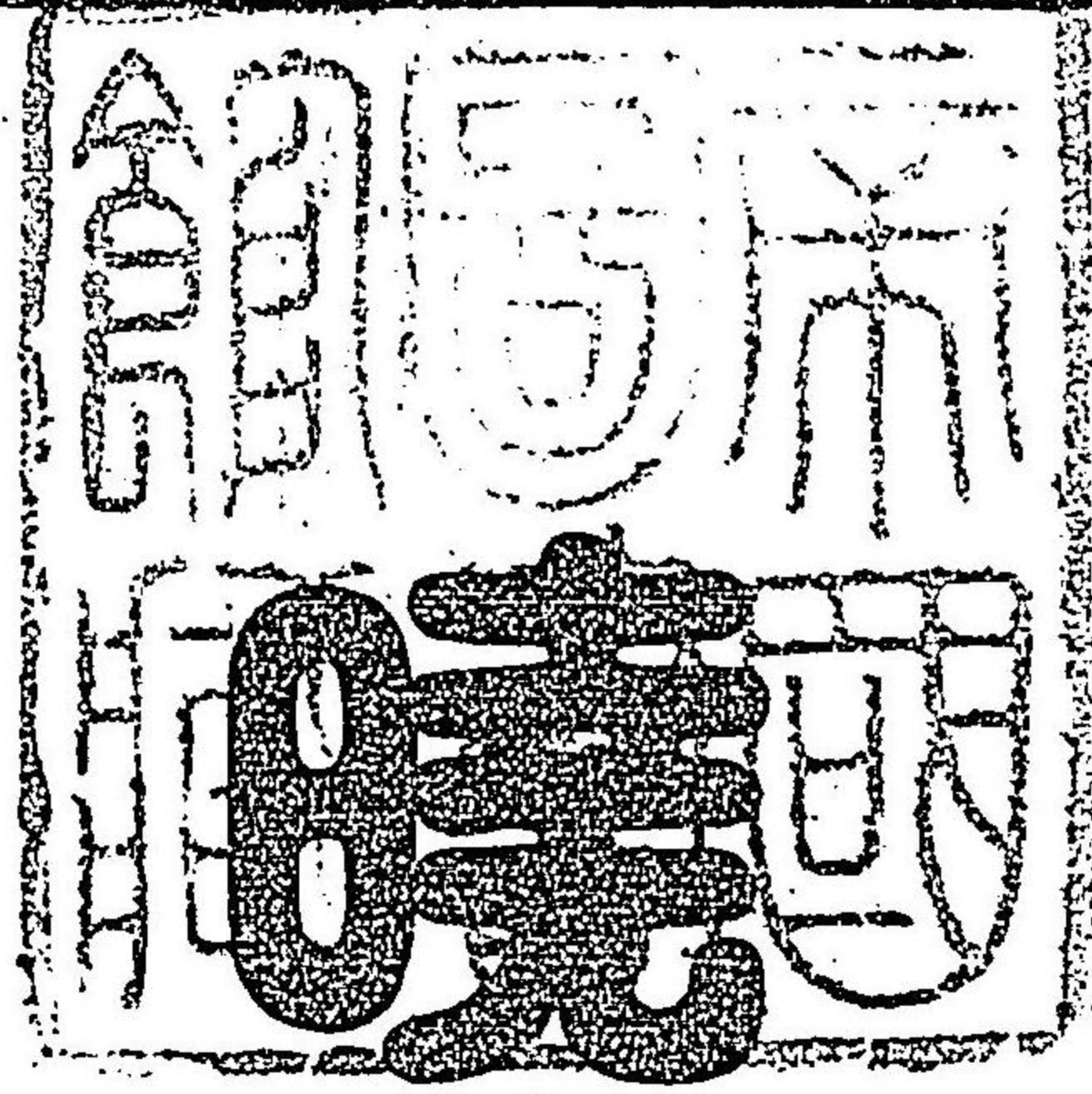
曉

天

258
3
288

特 18
460

PEEP OF DAY



天



序

日曜學校兒童の教育は近來漸く盛なるに至れり。然れども兒童の參考に資すべき書物は猶甚だ稀なり。荒畑もと子聊か茲に見る所ありて兒童のために此書を譯せられたり。原書は Peep of Day と題し、其發端に世界萬物の創造を叙し、次に基督の降誕より昇天に至るまでの間に起りし興味ある出來事などを述べたるものなり。即ち一種の基督傳なり。譯文は言文一致體にして兒童は容易に之を了解することを得べし。兒童のためには實に好個の讀物と謂ふべし。予は喜びて之を江湖に推薦すと云爾。

明治四十年十二月

教文館樓上にて

濶嶼誌

目次

第一課	身體に就いて……………	一
第二課	母親の慈愛に就いて……………	五
第三課	靈魂に就いて……………	九
第四課	善い天使に就いて……………	十三
第五課	悪しき天使に就いて……………	十六
第六課	世界 其一……………	二十一
第七課	世界 其二……………	二十四
第八課	世界 其三……………	二十七
第九課	アダムとエバ……………	三十一
第十課	最初の罪惡……………	三十五

目次

第十一課 神の聖子……………三十八

第十二課 處女マリア……………四十二

第十三課 イエスの誕生……………四十五

第十四課 牧羊者……………四十七

第十五課 博士……………四十八

第十六課 ヘロデ王……………五十

第十七課 試……………五十三

第十八課 十二使徒……………五十六

第十九課 最初の奇蹟……………六十

第二十課 奇蹟……………六十一

第二十一課 罪人としモン……………六十四

第二十二課 海中の暴風……………六十六

第十三課 ヤイロの娘……………六十八

第二十四課 パンと魚……………七十

第二十五課 イエスの仁慈……………七十五

第二十六課 主の禱……………七十六

第二十七課 イエス死を豫言せらる……………七十九

第二十八課 ラザロ……………八十二

第二十九課 イエスエルサレムに入る……………八十六

第三十課 殿……………八十九

第三十一課 エダ……………九十一

第三十二課 最後の晩餐 其一……………九十三

第三十三課 最後の晩餐 其二……………九十七

第三十四課 最後の晩餐 其三……………九十八

第三十五課 園……………百一

第三十六課 ペテロの否認……………百五

第三十七課 ポンテオピラト……………百九

第三十八課 ユダの死……………百十二

第三十九課 十字架 其一……………百十四

第四十課 十字架 其二……………百十六

第四十一課 十字架 其三……………百十八

第四十二課 兵卒等……………百二十

第四十三課 墓……………百二十一

第四十四課 復生……………百二十四

第四十五課 マグダラのマリア……………百二十六

第四十六課 二人の友……………百二十九

第四十七課 トマス……………百三十四

第四十八課 晝餐……………百三十七

第四十九課 昇天……………百四十二

第五十課 獄中のペテロ……………百四十四

第五十一課 ヨハ子……………百五十一

曉天

第一課 身体に就いて

諸子は、空中に在る太陽を、御存じでせう。

太陽は、誰れが彼の空中に置いたのですか、神様です。

諸子、彼様に高い所迄手が届きますか、とても届きますまい。

では、誰が太陽の落ちて來無い様に仕て居るのですか、それは神様です。神様は天に住居で入つしやるのです。天は太陽なんごより、モツトく高い場所なのです。

諸子は神様が見えますか、見えますまい。けれど神様は、諸子を見ておるでなさいませう。神様には何でも見えぬものはありません。

最初に神様は、萬物を御造に成りまして、又万物の世話をして居らつしやるのです。

神様は諸子を御造りに成つたのです、そして常時諸子の御世話をして居て下さるので
す。

諸子、手を口の處へ當て、御覽なさい、諸子の口から、何か出て來るのが知覺りませ
う、其れは呼吸です。諸子は絶えず呼吸をして居るのです。睡眠つて居る時でも、矢
張呼吸をして居ます。呼吸を爲すには居られ無いのです、ですが、誰が諸子を呼吸の
出來るやうにしましたか。

神様には何でも出來ます、神様は諸子に其様な小さな身体を與すつて、生て行かれる
様に、動ける様に、又呼吸の出來る様にして下さるのです。

諸子の身体の中には、骨が有ります。其骨は神様が堅固に硬く御造に成つたのです。
諸子の腕にも、脚にも、脊中にも、各々に骨が有りまして、兩脇の處などは、殊に澤
山有ります。

神様は、肉で此骨を御包みに成りました。諸子の肉は、柔か下暖かです。

其肉の中には、血液が有ります。

神様は、其外部に、皮を御被せに成りました。

其皮が、丁度着物の様に、諸子の肉や血液を覆ふて居るのです。

扱此等やうな、骨やら、肉やら、血液やら、皮の全体を指して、身体と申すのです。

此様な身体を、諸子に與さるとは、何と神様は御親切では有りませんか、何卒諸子の
身体に損傷の無い様に致度いものです。

諸子の骨は、折れることが有るでせうか、それは高い場所から墜ちたり、車に挽かれ
たりすれば折れます。

諸子が大變加減でも悪いと肉が耗損て身體が瘦せてしまします。

諸子は、長い間病氣で有つた小兒を見た事が有りますか。

私は病氣の兒を見た事が有りますけれども、諸子の様に頬も圓く無く、腕も其様で
は有りませんでした。

神様は諸子を強く丈夫にして御置きになつたのです。諸子の小さな身体を傷ける事は誠に容易い事では有りませんか。若しも鳥渡火の中に這入つたら、直ぐと焼けて了ふでせうし、熱い御湯でも掛けたら、湯傷をするでせうし、深い水の中に落ちて、急に引上げられ無つたなら、溺れて了ひませうし、大きな石でも諸子の頭の上に落ちて來たら、頭は碎けて了ひますし、窓からでも墜落たら、首の骨が折れて了ひ、四五日食物を食べなかつたなら、諸子の小さな身体は大變工合が悪く成つて、呼吸が止つて、死んで了ひます。さうしてみると諸子の身体は随分虚弱いものでは有りませんか。諸子は自身で病氣に成ら無い様に、又怪我をせぬ様に爲て行く事が出来ますか。それはモ一、怪我なごせぬ様に注意する事は勿論ですけれど、少しも害を受けぬやう、火や水の難に遭はぬやう、怪我をせぬやう、又病氣に罹らぬやうに諸子を護つて下さる事の出来る者は只神様許りです。

諸子、跪づいて、次の様に、神様にお祈りなさい。

「何卒私の哀な小さな身体を安全に護り給へ」

神様は諸子の御祈禱を御聴きに成つて、相變らず御世話をして下さいます。

第二課 母親の慈愛に就いて

此前の課で、諸子の身体の御話をしましたが、其諸子の身体は、最初から今と同様な大きさでしたでせうか。中々左様譯では有りませんが、一時は随分小さかつたのです。其様に小さかつた時分には、諸子は何と呼ばれて居たでせう。嬰兒と呼ばれて居たのです。現今では、其時分から見たら少々とは自分で注意されるでせうけれど、到底充分な事は出来は致しません。嬰兒は、單獨で歩行たり、口を利いたり、食べたり、衣類を着たり出来るでせうか。出来ません。

けれど神様は、諸子が嬰兒の間、大變能く世話をして下さる方を、御授けに成りました。それは誰でせう。

諸子が、嬰兒の時分、御世話をして下さった御母様です。御母様は、諸子を擁たり抱へたりして、慈しみ養育て、下さったのです。

諸子は、御母様がお好きでせう。必度左様です。

それは知れた事ですもの。けれど、其御親切な御母様を、誰が諸子に下さったのでせう。それは神様です。

つい近年迄、諸子の様な方々は、此世には居らつしやら無かつたのです、けれど神様は、諸子の小さな身体を御造りに成つて、それから諸子の御母様の許へ御遣りに成り、其御母様は、諸子を御覽に成ると直其時から、可愛がつて下さったのです。御母様が其様にも諸子を御可愛がりになり、又其様に親切にして下さる様に成さつた方は神様です。

諸子の善い御母様は、奇麗な衣服を着せて下さつて、泣けば何か食べさせて下さつて、睡眠る迄抱いて居て下さつたのです。諸子の笑ふ様にと、美麗物を見せたり。諸子を抑へて居て、足の運び方を教へたり、口の利き方を教へて下さつたり、それはく種々と可愛がつて下さつたのです。

今でも未だ、御母様は優しくして下さいますか。時々は御叱りに成る事も有りませうけれど、矢張可愛がつて下さいます。御母様は諸子を善い人に成さり度なので、それで時々御叱りに成るのです。

御母様は單諸子の食物の事を注意に成る計りで無く、諸子の御稽古の事にも注意に成るのです。

生命の有る限り、御母様は諸子に、必度親切にして下さいます。

けれど、此様御母様を諸子に下さつた方の事を忘れても不可ません。

神様が下さつたのです。

御母様は諸子を、生して置かれるでせうか。其様事は出来ません。物を食させては下されまますけれど、呼吸の續いて行く様には成る事は出来ません。神様は、諸子の事を、例令一分間でも、御忘れには成りません。萬一御忘れに成れば、諸子の呼吸は止つて了ひます。

諸子は御母様の御親切を、考へて見た事が有りますか。必度有るでせう。そして度々「有難う」と仰しやるでせう。其時折はかじり付いて、「御母様、私好きですよ」などと仰しやる事も有りませう。では諸子、諸子に御母様を下さり、生て居られる様にして居て下さる神様に、御禮を仰やいませんか。神様にものを云ふ時は、膝をつかなければ不可ません、それから「神様、貴殿は今迄私に大變御親切にして下さいました。私は御禮を申します、又私は貴殿が好きで御座います」と仰しやるのです。神様は、諸子の御禮を御聞きに成るでせうか。必ず御聞きに成り、又御喜びに成ります。

第二課 靈魂に就いて

神様は犬にも御親切でしたでせうか。矢張身体を御與へに成りましたでせうか。それは其様です。

では犬にも骨や肉や血液や皮膚が有るのでせうか。それは有ります。

すると犬も矢張、諸子と同様に身体を有つて居るのですが、犬の身体は諸子と同様でせうか。違ひます。

諸子には幾本足が有ります、二本でせうか。

犬は幾本ですか、四本です。

諸子は腕が有りますか、二本有りますか。

犬には腕が有りますか、無いでせう、腕も無ければ手も有りません。其代り、犬には脚が有ります。諸子の皮膚は柔軟ですけれど、犬のは毛で満身です。

猫の身体は諸子の通りですか、違ひます、毛皮で包まれて居ます。

鶏の身体は如何ですか、幾本足が有りますか、二本有ります。

で、諸子も其様でせう。けれど其脚は諸子と同様ですか、違ひます。鶏のは細い黒

つぽいので、足頸でなくて距が付いて居ます。

諸子の皮膚には羽毛が生へて居ますか、又翼が有りますか、諸子の口は鶏の嘴の様で

せうか、鶏には歯が有りますか。其様事は有りません、鶏の身体は毫も諸子のと似て

は居ません。併し鶏も身体は有ります、肉も有れば骨も有り、液血も有り皮膚も有る

のですもの。蠅にも身体が有りますか、有ります、黒い身体で、黒い六本の足と、二

つの硝子の様は翼が有ります。でも諸子の様なのでは有りません。

犬や馬や鶏や蠅まで、誰が身体を下すつたのでせう、誰が生して置くのでせう。

神様は彼様動物も常時御心に留めて居られます。

犬は神様に感謝することができませうか。

能ません、犬でも馬でも羊でも牛でも、神様に感謝する事は能ません。

何故能せんか。

口が利け無いらですか。

左様では有りません。

理由は神様の事が考へられ無いらなのです。神様の事を聞いた事も無く、又理解事

も能ないのです。

何故不能ないのでせう。彼等には諸子の様に靈魂即ち精神と云ふものが無いらです。

では諸子には靈魂が有りますか、有ります、諸子の身体の中には、死ぬ事の無い靈魂

が有るのです。其靈魂で神様の事が考へられるのです。

神様が諸子の身体を御造に成つた時、其中に靈魂を御入れに成りました。諸子、嬉い

と思ひませんか。神様は犬を御造に成つた時には諸子の様な靈魂は御入れに成りませ

んでした、それでは犬は神様の事が考へられ無いらです。諸子の靈魂は私に見えるで

せうか、見えません。誰でも神様の外は見えないのです。神様は今諸子が何を考へて居るか御存じなのです。

諸子の靈魂と身体と何方が好いのでせう、それは靈魂の方が余程好いのです。何故好いのでせう、諸子の身体は死ぬ事が有りますけれど、靈魂は死ぬ事は有りません。

諸子の靈魂は何で造て居ますか。

靈魂即ち精神は神様の呼吸で造て居るのです。諸子の身体は死んでも、靈魂は生きて居て無くなつては了は無いのです。

嬰兒でも靈樣即ち精神は有ります。可愛い小さい嬰兒が死ねば、呼吸は止まり感覺は無く成り、何も見えず、何も聞えず、睡眠つて居る様です。愛らしい小さな身体は余り熟く睡て居て諸子には呼び覺す事は出来ません。けれど身体に有る靈魂は何處へ行きましたか、それは神様の許へ行つたので、永遠も幸福で居るのです。

諸子、神様に此樣靈魂を下つた御禮を仰やいませんか、諸子の身体が死んだ時、神様と一緒に生て行かれる様に、諸子の靈魂を伴て行つて下さる様に御願ひなさいませんか。

「私の身体の死にました時は、私の靈魂を爾と共に生て行かれる様に爲し給はん事を祈り奉つる」

と神様に御祈りなさい。

第四課 善い天使に就いて

諸子、神様は天に住居しやると云ふ事は御存じでせう。それで神様は靈ですから、身体は有りません。

して神様は、天に單獨で住居しやるのでせうか。左様では有りません、神様の聖座の周圍には充溢に天使が居るのです。天使と云ふのは如何な人々でせう。

天使は靈で、太陽の様に輝いて居ますけれども、併し神様程には行か無いのです。と云ふのは、神様は太陽などよりは猶更輝いて居らつしやるからです。天使は常時神様を見て居るので、天使が輝くのは悉皆神様が其通爲さるのです。

天使は、神様の事を歌つた歌を唱つて、神様の善良事、智識の深い事、又偉大い事を語つて居ます。

天使は此の様に歌を唄ふ事に倦きもしなければ、又睡眠り度いとも思ひませんから、天國には夜と云ふものは有りません。

又病氣と云ふ事も有りませんから、死ぬ事も無いのです。

天使は常時幸福ですから、泣くなど、云ふ事は決して有りません、ですから頬には涙の有つた事は有りません常時可愛い笑を浮べて居るのです。

萬一此天使が悪い事を爲る様なら、幸福な筈は有りません、人間が幸福で無いのは常例悪い事を爲るからなのです。

天使は悉皆全然善良人連で、神様を大變に愛し、又仰しやる事は一切能く心に留めて居るのです。

天使は又大層疾く飛べるのです、それで神様は我等の世話を爲せに此世に御遣しに成ります。神様が行くと仰しやると、天使は即刻に飛び始すのです。それで一同強いのですから我等の損傷が無い様に防ぐ事が能るのです。諸子、夜間此天使に側に居て貰ひ度いと思ひませんか。

諸子、此天使は神様の御命令が無くては決して來無いのですから、神様に遣して下さる様に御願ひ成らなければ不可ません。

神様は天使等の御父様なのです、そして諸子の様に、御父様は二人有るのでは有りません。天使は神様の子供で、天に在る神様の家に住居で居るのです。諸子が御父様の仰しやる事を心に留めて行く様なら、それこそ神様の御心を心に留めて居る天使と同様です。

天使は我等を大層愛して居て、何卒我等が善良人に成つて、天國に来て自分等と共に住居様に成れば好いと望つて居るのです。子供が何か悪い事を爲て、ア、悪かつたと思つて、赦免て下さる様に神様に御祈禱しますと、天使は大層喜びます。神様を愛して居る幼い兒が病氣に成つて死に相に成りますと、神様は「行つて彼の兒の靈魂を天上へ持つて來い」と天使に仰しやいます、すると天使は飛んで降りて來て、天國に持つて行つて了ふのです。

其時には、其子は如何に幸福でせう。苦痛は終り、全然善良人に成つて、天使の様に輝くのです。手には樂器を持つて、神様を讚美する美しい歌を唱ひ始めるのです。

子一諸子、諸子も死んだらば、靈魂を携に、天使を遣して下さる様、神様に御祈なさいませんか。

第五課 悪しき天使に就いて

神様は何時頃から天國に御住居初めに成りましたか。

神様は始終天國に居られました。

諸子の様な、幼い子供は未だ居無つた時代はありましたけれど、神様は常時居らつしやいました。

昔太陽の無つた世は有りましたが、神様は常時居らつしやいました。

天使の居無い時は有つたとしても、神様だけは常時居らつたのです。

誰も神様を造つた者は無く、神様は萬物の原始で有つて、又凡百の物を御造りに成つたのです。

長い々々以前に、神様は天使を御造りに成つたので、何人位御造りに成つたでせうか。これは幾人だか、誰にも不明ません、唯算へ盡れ無い程澤山で、一同善良又幸福で有つたのです。

けれども、其中に漸々悪く成つて、神様を愛する事を廢止て了つて、威張つて見たり、

御命令に背いたりする者が出来ました。

斯様に悪く成つた者を、神様は天國に猶止めて御置きに成るでせうか。

御置きには成りません、神様は追ひ出して、鎖を付けて暗黒中に御置きに成りました。

此の様な悪い天使の一人は悪魔と云はれて居ます。之れは悪い天使の首領又王なので、悪魔と云ふのです。

サタナは大變悪くて、神様を嫌つて居るのです。最早天國へは歸つて行く事は不能ま
せんけれど、我等が住居で居る此世に来るので、自分の外に猶悪い天使を連れて來ま
す。

サタナも亦靈ですから、我等には見えませんが、常時歩行廻つて居て、人間を悪
く爲様として居るのです。サタナは悪事が好きで、善良く成り度いとは思は無いので
す。それで人間が苦難んだり悲歎たりして居るのを見ると喜ぶのです、何故と云へば、
其様したら人人が自分の方へ來て、自分と共に住居で有らうと思ふからです。勿論サ

タナは私共の中誰一人でも天國に行く事は望ま無いのですから、私共が悪い事を致る
様に、又神様に御祈禱を爲無い様に爲せ様と、骨折つて居るのです。

サタナは如何程悪いかと云ふ事は私には諸子に御話が不能ません。何しろ大變に残酷
には違が有りません、人間を苦しませるのが好きなのです。それで人間に教へ眞
實で無い事を言ふ様に致します。それに高慢ですから、神様の仰しやる事よりか、自分
の言ふ事の方を聞かせ様と望つて居ます。又嫉妬深いので人間が幸福で居るのを見て
は堪られ無いのです。

サタナは自分が不幸で有る通り各人も不幸に爲度いと望つて居ます。悪い人は必然不
幸だと云ふ事も知て居るのです。諸子は悪い事を爲た事が有りますか、又痾癩を起し
たり、如何でも介意ないなど、云つた事が有りますか。で無ければ高慢ですか。萬一
其様事なら諸子は必然不幸です。

では、神様は此悪魔に迷はされ無い様に爲て下さる事も能るでせうか、能ますとも、

神様は悪魔よりか、ズツト々々強いのですもの。其上神様は常時諸子の側に居られるのです、神様は何處にでも居らつしやるのですから、處がサタナは同時に何處にでも居ると云ふ譯には行か無いのです。それはサタナは自分の命令通りの場所へ行く澤山の天使を持つて居ますから、諸子の許へも随分度々来る事は來ます、けれども神様は常時でも居らつしやるので、諸子の前にも後にも、兩側にも、諸子が御睡眠の時は臥床の邊にも、又歩行く時は道路にも居らつしやるのです。ですから諸子はサタナを恐怖がら無いでも介意のです、單神様に御助下さる様に願ひさへすれば其通りに爲て下さいます。

サタナは諸子よりか餘程強いのですけれども、神様は萬物よりも強いのです。諸子が單一人で居らつしやる時に、誰か來て酷め相に成つたら恐怖いと思ふでせう。けれども其時御父様が此處の方へ來るのを見たら諸子は一生懸命に其方へ走て行つて、最早恐怖くは無くなりませう。諸子、神様は諸子の御父様なのです。そしてサタナが諸子を

酷め無い様に爲る事が能るのです。

「愛する父よ、サタナの様な悪人に成らぬ様私を守護給へ」と神様に御祈りなさい。

第六課 世界 其一 (創一〇一十)

我等の住居で居る此廣大な場所は世界と申しまして、誠に美しい場所です。仰視けば青空が有り、俯瞰れば蒼い草が有ります。

青空は我等の頭上に擴られた幕の様で、草は脚下に敷物を舒たかの様で輝いて居る。太陽は我等に光線を與へ、蠟燭の様な有様です。此様な美しい世界を造つて我等に住居はせて下さるとは、實に神様は御親切では有りませんか。

神様が原始に此世界を御造りに成つた時は、光輝く天使に圍繞かれて天に居らしたのです。

神様は常時御自身と同一の息子が御有りに成りますが、此息子も御一緒に夫に居られました。

此息子の名はイエス キリストと申すので、御父様で居らつしやる神様の通りに善良又偉大い御方なのです。

御父様も息子も神様なのです、常時御一緒に住居で居らつて相互に非常に相愛つて居らつしやいます。御父様も息子も一人の神様でして此世界を御造に成つたのです。神様はマア如何様にして此世界を御造りに成りましたでせう。第一番に光を御造に成りました。神様が「光を授ける」と仰しやいましたら光が出来ました。神様の外には誰一人口を利いた計で物を造へる事は出来ませんが、神様は無一物場所から物を御造りに成つたのです。僅口を御利きに成つた計りで最早光りが出来て了ひました。

次に神様は空気を御造りに成りました。

空気は諸子には見えませんが、何處にでも存在のですから、感じる事は出来ます。

時々音響が聞えませう、子一諸子風の吹くのが、彼の風は空気なのです。

其次神様は大變高處に水を御置きに成りました。彼の雲は水が溢盈有るので、それが時々落下て来ますが、それを我等は雨と云ふのです。

神様は廣大な深い場所を御造りに成りましてそれに水を一溢御入れに成りました。神様が水に御命令に成りましたら、水は其深い場所に這入つて来しました。神様は此水の事を海を御呼びに成りました。

海は誠に廣大くて、常時彼處此處へと動いたり衝撞たりして居ますけれど、神様が「其處に止め」と仰しやいましたので、神様の御入れに成つた廣大い深い場所から出る事は出来無いのです。

風が強くと吹きますと、海は音を立て嘯ります、神様は又我等の歩行く用に乾いた土地を御造りに成りました、我等は其を地面を申します。我等は海の上を歩行たり家屋を建築たりする事は不能せんが、地面は堅くて固定して乾いて居ますから其様事も能る

のです。

サア諸子、私は神様の御造に成つた五種の物を諸子に御話致ました。

第一、光。

第二、空氣。

第三、雲。

第四、海。

第五、地面。

此様美麗い廣大な世界を神様が御造に成つたのですから一同で神様を讚美致様では有りませんか。

第七課 世界 其二 (創一〇十一—一九)

神様が此世界を御造に成りました時には地上には無一物全然空虛でした。それ故神様

は御命令になりましたので、それから地中から物が發生たのです。

樹木が發生て來ましたが、皆各自異種な綠葉で充溢でした。その中或者は櫟の木と呼ばれ、又或者は榆だとか樺だとか呼ばれて居ます。又或木は、梅だとか林檎だとか密柑、無花果の木の様に美味果實の結るのも有ります。

野菜類も同様地中から發生ました。馬鈴薯、豆類、玉菜、萵苣菜の様なのが野菜と稱ふのです。

穀類も發生しました。穀類の中には、小麦と云ふのや大麦と云ふのや燕麥と云ふのや種々有りますが、何種も其穂が成熟と垂下て黄金の如に黄色く成ります。

神様は柔軟な青草を發生し、又其中間には諸種の色の、又佳い香氣の花も發生る様になさいました。白色百合花や、紫色の萼、又種々の色の薔薇の花などが、マア其中で最も美麗い花でせう。

私は諸子に今、地中發生る五種の物の御話を致ました。

- 第一、樹木。
- 第二、野菜。
- 第三、穀類。
- 第四、青草。
- 第五、花。

此世界が青草や樹木で飾られた時は實に美麗御座いました。併し神様と天使の外に此美麗さは知りません。

其後神様は蒼空に太陽を御置きに成つて、終日輝いて世界の一方の端から他方の方へと行く様に御命令に成りました。神様は又、夜間は月の輝る様に又蒼空には一面に星を御置きに成りまして同様輝やく様になさいました。諸子は未だ太陽程に輝いた物を御覽に成つた事は有りますまい。實に大な物です、只非常に遠方に有るので小さい様に見えて居るのです。神様が抑へて居らつしやるので落ちて來無いのです。神様は太陽

が空中を回轉様になさいました。

神様は夜間を暗くして、我等が休息み又能く睡眠る様になさつたのですから、月は太陽程には輝きません。

誰でも星の勘定が出来るでせうか。神様の外は誰にも出来ません。神様は各自の名も亦數も御存じです。我等は月や星を見る毎に、實に神様は偉大御方だと考へなければなりません。其様偉大方が又、小な鳥類の世話をなさり、又小い子供を御可愛がりに成るのです。

第八課 世界 其三 (創、一〇二一—二五)

神様は斯様して種々の物を澤山御造りに成りましたけれど、一つとして生物は有りませんでした。それで最後に生物を御造りに成りました。神様が御命令に成りますと、水は最早幾許と云つて數へる事が不能い程に澤山の魚類 盈溢に成つて了りました。

其中には極々細微いのもあれば、又實に巨大のものも有りました。諸子は鯨の御話を聞いた事が有りますか、其長さ云つたらマア大きな教會堂位は有りませう。總て魚類は冷たくて脚が無く、唱歌ふ事も不能ければ口も利きません。神様は又此魚類よりも美麗で、空中を飛び廻る様に鳥類を御造りに成りました。鳥類は樹梢に止つて枝の間で唱歌ふのです。

鳥類は翼が有つて、全体種々の色の羽毛で裏まれて居ます。駒鳥は赤色い胸をして居ますし、金翅雀は黄色い羽毛ですし、「カスケ」と云ふ鳥は藍色つばい様な羽毛ですが、孔雀が此等鳥類中で一番美麗でせう。頭上には小さな總の様な物が附着して居て、後部には長く々々尾毛を曳いて居て、それを社々廣げますが、丁度大きな扇を見る様です。

「ツグミ」の種族や紅雀などは可愛い聲で唱ひますが、此處に一種モット々々可愛い聲で唱へる鳥が有ります。それは彼の鶯です。

又鳥類の中で水上を泳ぐ物があります。鶯、鴨、又彼の雪の様に白い羽毛で長い首の白鳥などが其物なのです。

或る鳥は中々長身う御座います。駝鳥などは凡人間程の身長ですが、彼の鳥は他の鳥の様に飛ぶ事は不能せん、其代り實に迅速く走られるのです。

鶯は大變高處に巢を造りますが、翼が非常に強健ですから雲の有る處程の高處でも飛び沖られるのです。

鳥類の中で一番柔和い者は鳩です。此鳥は唱ふ事は不能せん、只單獨坐つて何だか悲し相に優しく呻つて居るのです。

今此處で全体の鳥類の名を一々申す事は不能せんけれど、今迄御話し致無つた鳥で諸子の御存じのも種々有りませう。

生物で虫類と云ふ一種類が有ります。神様は魚類は水中から御造に成りましたが、虫類は地面から御造りに成つたのです。虫類は小さな物で、蟻の様な工台に地上を這ふ者

です。或虫は蜂や蝶々の様に飛べるのも有ります。蜂は花の液を吸つて蠟や蜜を造ります。又蝶々の翼は美しいでは有りませんか、彼れは余り微小くて見えませんけれど、小さい々々羽毛で裏まれて居るのです。

最初に神様が御造りに成つた時は何種の虫も皆善良奇麗なものでした。

最後に神様は獸類を御造りに成りました。御命令に成りましたら、悉皆地中から出て來ました。獸類は地上を歩行もので、大概は四脚です。諸子獸類の名は澤山御存じでせう。羊牛犬猫の様なのか獸類です。併しまだ々々種類の異つた種類が有ります栗鼠の様に枝から枝へと跳び廻つて居るのも有れば、地中の穴に住居で居る兎の様なものも有り、高い丘などを昇る山羊の様なのや、美しい角の有る鹿、黄色つばい毛の獅子やら、縞の有る毛皮の虎なんども有ります。中で一番巨大なのが象で、一番強いのは獅子、一番感覺の敏いのが犬で、一番美麗なのは鹿、又一番柔和いのは小羊です。鳩は鳥類の中で一番優しく、小羊は獸類の中で一番柔和いものびす。

扱これて神様は此世界を生物で充實になさいました、それで其生物は悉皆善良もの許で、獅子や虎の様なものさへ、善良又無害なものでした。私は諸子に生物を四種類御話致しました。

- 第一、魚類。
- 第二、鳥類。
- 第三、虫類。
- 第四、獸類。

總て此前述した生物等も身体は所有て居ります、けれど何一つとして諸子の様に靈魂は所有て居りません。彼等は動作又呼吸する事は能ます、で神様は日々食を御與へに成つて生して御置に成るのです。主は彼等一同に御親切です。

第九課

アダムとエバ

(創一。二六、二。二四)

這回は最終に神様が御造に成つた物の御話を致ませう。

神様は土の塵を取つて人の形骸を造り、之れに生氣を嘘入れて靈魂を御與へに成りました。夫故其人は神様の事が理解たのです。此人の名はアダムと云ふのです。アダムは最初神様と同一様な善人で、又神様を非常に愛して居ました。

神様は果實の盈満生つて居る樹木が盈溢して居る園にアダムを御置きに成りました。此園をエデンの園と申すのです。神様はアダムに總体の獸や鳥類を御見せに成りまして、アダムの欲ふ通りに名を御付けさせに成りました。神様はアダムに對ひ「我は汝に全體の魚類も虫類も鳥類も獸類も與す。汝は此等のもの、主人で有る」と仰しやいました。夫故アダムは地上の總体の物の王で有りました。

神様は又アダムに對ひ「此園の樹木に生る果實は食べて可しい」と仰しやいました。併し神様はアダムを遊せて計は御置に成りません。此園の世話をする様に御命令に成りました。諸子此事を見ても神様がアダムに對して如何程御親切で有つたかと理解りませう。

處でアダムには誰も友達が有りませんでした、と云ふのは、外の獸や鳥では話相手に成りませんから。それで神様は、アダムの友達に女を造へ様と仰しやいました。神様はアダムを熟睡せて御置に成つて、それからアダムの肋の場所から骨と肉とを取つて、其骨肉で女を御造りに成りました。アダムは目を醒して此女を見ましたが、自分の肉と骨で出来て居る事を知つて居まして、此女を非常に愛しました。最初此女の名は「女」と云ふのでしたが後世にエバと成つたのです。

扱諸子、神様の御造りに成つた物悉皆の事を御聞きに成りました子。其物は悉皆美しく、又總ての生物は全然幸福で、苦痛も無く、歎息事も無く、此世界中には罪惡と云ふものは一つも有りませんでした。

神様は此世界を造る爲に六日間を御消費しに成りました。悉皆落成りました時、第七日には何事もなさらずに御休息に成りました。天使達は、神様が御造りに成つた此世

界を見て喜び、神様を讚美する美しい歌を唱ひました。神様の息子イエス、キリストはアダムとエバを御愛しに成りましたので、矢張御喜びに成りました。諸子は、如何して私が、此世界を造へられた事を知つたろうと御思ひでせう。それは聖書と云つて、神様の御本が有りますが、其本中に書いて有るからです。一同で神様が御造りに成つた物を悉皆算へて見ませう。

第一、光

第二、空氣。

第三、雲。

第四、海。

第五、地面。

第六、地中から發生する物。

第七、太陽と月と星。

第八、種々の生物。

第十課 最初の罪惡

(創三〇)

アダムとエバはエデンの園で誠に幸福に暮して居ました。兩人は一緒に話をしたり、運動したりして、喧嘩などは一度もせず、自分等に對する神様の御親切を思つて讚美して居りました。

神様も時々此兩人と御話を爲しました。兩人は神様を恐れて居ませんでしたから、聖聲を聞くのを樂みにして居りました。

處で、此處で神様が爲て成らぬと、兩人に御命令に成つた唯一の事が有りました。

此園の中央に一本の木が有りまして、それには美麗な果實が生つて居りました、けれども神様はアダムとエバに「彼の木の實を食べると死ぬから、決して食べては成らぬ」と仰しやいました。

アダムとエバは神様の御命令を聴くのを喜んで居りましたから、此果實を食へ度いと望みませんでした。

諸子、神様を嫌つて居るサタナ、彼の悪い天使の事を御承知ですね、其サタナが此アダムとエバを嫌つて居まして、如何かして此兩人を悪化くして、天國に行つて神様と御一緒に住居は無い様に爲度いものと思つて居ました。それで、例の果實を食へる様に誘惑て遣うと考へ付きまして、やがてエデンの園に行き、蛇の様な様子を爲て居りました。

すると例の木の傍にエバ計りで居るのを見ましたので「何故貴女は此果實を食へ無いのですか」と申しました。

エバは答へて「私は決して食へません。萬一食へれば死ぬと神様が仰しやいました」と申しました。

すると蛇は「否死には致しません、此果實を食へると利發に成るのです」と申しました。

ので、エバは果實を見ましたが、實に美麗で美相でしたので、一つ二つ摘つて食へて了ひ、アダムにも與つて、又アダムも食へて了ひました。此果實を食へたとは、誠に兩人は悪い行爲をしたものです。

サア兩人は悪く成つて來まして、神様を愛さ無い様に成りました。

其内園の中に神様の御聲が致しましたが、兩人共恐怖つて樹木の間で隠れて了ひました、神様は何處でも御見えに成るのですから、隠れたとて御覽に成りました。

それで神様は「アダム、汝は何處に居る」と仰しやいましたので、アダムもエバも木の下から出て來ました。

神様はアダムに對ひ「我が食へて成らぬと汝に命令て置いた果實を食へたのか」と仰しやいますと、アダムは「此女が私に食へると勧誘しましたから」と申しました。

其處で神様はエバに對ひ「汝の爲たる事は何で有るか」と仰しやいますと、エバは「蛇が私に食へると勧誘しましたから」と申しました。神様は蛇に非常な御怒を現はされま

して、永遠も罰を受させると仰しやいました。
 神様はアダムとエバに對ひ「汝等は死ぬであろうぞ。我は汝等を塵から造つたれば、再以前の塵に復へるで有らう」と申されました。神様は此兩人を最早此美しい園には御置きに成らず、此園から追出して御了ひに成りまして、モウ二度と此園へは御入れに成ら無い事に成りました。それで神様は輝いた一人の天使に命けに成つて、火の刀を持つて門の前に起立、アダムとエバを入れぬ様に番を御爲せに成りました。

第十一課 神の聖子

(創三。一四—二四)

諸子、アダムとエバがエデンの園を追はれた事を聞いて、氣の毒とは思ひませんか。園の外部は中々其様樂しい場所では無く、園の内部には唯美麗な花や甘い果實計り有つたのですが、外部には雑草や薊の様な物が澤山に有りました。何しろ今迄の様に、四季樹上には果實が生つて居ると云ふ譯には行か無いのですか

ら、アダムは熱く成つて又疲勞れて了ふ程に、地面を掘り返へさなければ成ら無いので、時々は身体が痛むのを感じました、それで髪の毛も漸々白色く成つて來て、終には實際年寄に成りました。

エバも幾度と無く病氣をしたり、衰弱たりして、随分涙が流れる事なども有りました。アダムもエバも可憐に、神様の御命令さへ聞いて居たなら、永遠も幸福で居られたでせうのに。

アダムもエバも自分達は何時かは死ななければ成ら無いと知つて居ました。神様は此兩人に小さい子供達を御與へに成りましたが、アダムとエバは此子供達も矢張死ななければ成らぬと知つて居ました。神様は最初此兩人を塵から御造りに成りましたから、再塵に復るのだと、兩人に仰しやいました。

併しました此よりも最と悲しまなければならぬ事が有りました。それは彼等が漸々悪く成つた事です。昔時の様に最早神様を讚美し無く成つて、種々な悪い事を欲爲る様に

成りました。サタナは悪い者は天國で神様と御一緒に住居事の不能いを知つて居ましたから、此人人も自分と一緒に罰せられる様に爲様と思つたのです。

此事は實に、アダム、エバの爲めにも亦一同の子供達の爲にも、悲しい事で有りました。併し神様は不憫だと御思ひに成りました。それで御親切にも、此人々を救ける方法を工夫なさいました。

神様は、ズット々々々以前に、聖子に對ひ「アダム、エバと其子達は一同汝が彼等の代りに死んで遣らなければ罰せられなければなら無い。我愛して居る息子だが、汝を遣はさう。汝は人間の身体をして、世界に行つて住居で、我の命令を聽いて、アダムと其子達の爲めに死んで遣る様に爲やう」と仰しやいました。

聖子は聖父に對つて「私は參ります。尊父の慾まれる事なら、何事でも致します。御命令に服ひますのは私は大好で御座います」と仰しやいました。

斯様理由で聖子はアダムと其子達の爲に死んで遣うと云ふ事を御約束に成りました。

非常に愛して居られました、可愛い々々々聖子を遣はされるとは、誠に御親切な事では有りませんか。

又聖子は、御自身の玉座を離れて、又輝いて居る天使にも、又愛する聖父にも別れて、人間の身体をして、死んで下さるとは、何たる御親切で御座いませう。

諸子、私等はアダムの子供から出た又子供の子供の中なのです、それでイエスは私等の爲に死に居らつしたのです。私等は悪くつて、萬一イエスが代りに死ぬ御約束を成さならなかつたなら、神様と御一緒に住居事は不能いのです。斯様にも可憐と思つて下さつたのですから、一同聖父と聖子を愛さなければ成らない理です。天使と一緒に成つて神様を讚美して、

「聖父よ、唯一の聖子を予へられました、優しい愛の爲に感謝し奉る」
「聖子よ、血を流し又死ぬ爲に御降下に成りました優しい愛の爲に感謝し奉る」と申しませう。

父は聖子を人間として御遣しに成る時期を長い間待つて居られました。
 其間、聖子は爲様と約束せられました事を常時考へて、天國で待つて居られました。
 併し聖父が遣うと御思ひに成る迄は、人間に成りに行かうとは成さいませんでした。

第十二課 處女マリア (路一〇二六―五五)

神様はアダムとエバに御自分の聖子を身代りに死なせる様に御遣はしに成る事を御話
 しに成りましたけれど、兩人共漸々悪くなつて來ましたので、神様を愛しませんでし
 た。

でも神様は、此様な人々でも善良する事が御能に成りましたでせうか。
 それは能ました。天國には聖靈と云ふ者が在りまして、其聖靈が來て人々を善良する
 事が能るのです。

子―諸子、我等は悪い者なのです、けれど神様は聖靈で以て善良なる事が能るので
 す。神様が聖靈を我等の中に御入れになりますと、我等は神様を愛し又天國に行つて
 神様と共に住居様に成るのです。

ですから諸子、聖靈を諸子に下さる様に、神様に御願ひなさい、そして「何卒私の善良
 成れます様に、私に聖靈を與へ給へ」と仰しやい。

アダムは澤山の子供が有り又孫が有りまして、其又子から又其子と漸々に經過て來て、
 遂此世界が人間で充満に成りました、諸子にも私にも計算へられ無い程澤山の人々が
 居る様に成りました。

扱、アダムやエバが死で了つてから長年經過此世界が人間で充満に成りました時に、
 神様は聖子に「サア、世界に降下が宜かろう」と申されました。

處で神様は、何の人も最初は嬰兒なのですから、聖子も矢張最初は嬰兒に成さる事に
 なさいました。

神様は、或る貧乏な女の嬰兒に成る様に、聖子を御遣はしになりました。此女の名は

マリアと申しました。マリアには小さい子供は有りませんでした。此女は善良人で、神様を愛して居りましたで、神様の聖霊が此女の中に存在したので、それで謙遜で柔和かつたのです。

一日天使が此女の許に参りました。マリアは輝いて居る天使を見て驚きましたが、天使は「マリアよ驚くには及ば無い。神様は汝を愛されて、神の聖子で有る一人の嬰兒を、汝に御遣はしに成るので、其聖名はイエスと御命名なさい、此イエスは人間を罪悪から救ふ爲に來しやるのです」と申しました。

マリアは天使の言語を聞いて吃驚しました。自分は主イエス、キリストの様な嬰兒を所有様な善良人間では無いと思ひました。

マリアは、天使が天國に歸つて了りました時此恩寵の爲に、神に感謝の好音歌を唱ひました。マリアは「我靈魂は神を讚美、我精神は我救主の故に歡喜ぶ」と申しました。マリアは自分の嬰兒は、やがて自分を救ふのだと知つて居りましたから、我救主と稱

たのです。

第十三課 イエスの誕生 (路二〇一七)

マリアにはヨセフと云ふ所夫が有りましたが、此人も善良人で、マリアに大變親切に致しました。

未だマリアの嬰兒が生まれません以前に、當時の王は國中に命令して、各自々身の姓名を書留ける様に致しましたので、マリアもヨセフも自宅を出立て、遠方へ行きまして、遂ヘツレヘムと云ふ都へ行き着きました。

其時に夜中でしたが、何處へ寢様かど、或る旅館へ行きました。「何卒か我等を宿めて下さい、遠方から來た者です」と申しましたけれど、旅館の主人は「宿める部屋が有りません」と云ひました。

可憐相にマリアは如何したでせう、マサカ外部には睡られますまひに。

マリアは、旅館の主人さへ許すなら、馬小舎でも關は無いら宿めて貰ひ度いと申しました。それでマリアとヨセフは馬小舎に這入りました。

小舎には牛だの驢馬たのが這入つて居ました。扱マリアが此小舎に在りました間に、神様は御約束なされた嬰兒を御遣はしに成りました。マリアは此嬰兒は、別段外の嬰兒と異つた處は有りませぬけれども、神の聖子で有ると知つて居ました。

マリアは嬰兒を長い衣服に包みましたが、寝かせる寢床が有りませぬ、牛や馬が居るのですから。万一踏まれてもしては大變ですから、地上へは置かれませぬ、それから傍に有つた秣槽の中に入れて、自分は側に坐つて注意して居ました。

御可愛い嬰兒を、マリアは如何なにか可愛く思つた事でせう。

此嬰兒は外の嬰兒の様な、悪い心は持つて居りませんでした。イエスには罪惡は無いのでしたけれど謙遜つて萬事柔和う御座いました。それで、外の嬰兒は寢床も亦軟かな枕も有りましたのに、イエスは秣槽の中に睡つて居られたのです。

第十四課 牧羊者 (路二〇八一—二〇)

ベツレヘムの近處に某原が有りました。イエスの御生れに成つた夜に、數人の牧羊者此原で羊の傍に坐つて居ました。何故夜だのに起て居たかと申しますと、夜中は狼だの獅子などが出でますから、羊を奪られ無様に番をするのです。我等の住居で居る近處には獅子などは居ませぬけれど、ベツレヘムの近處には多少は居たのです。

其内此牧羊者は一大光明を見ました。それから一人の美しい天使が天國から現れました。牧羊者は恐怖しましたが、天使は「恐怖くに及ばぬ。汝等に好音を齎て來たのだ。神は汝等を救ふ爲に、天國から聖子を御遣しになつた。其聖子は今嬰兒で、秣槽の中に寝て居られる。ベツレヘムに行けば、見る事が能やう」と申しました。

天使の言語が了ると同時に、何萬とも云ふ大勢の天使は空中に現れて、神様が人間を救ふ爲めに聖子を御遣しに成つた事を、讚美る歌を唱ひ始めました。

其内此天使達も天國に歸つて、牧羊者計りに成りました。
 諸子、此牧羊者は矢張羊の番を續けて居たでせうか。
 否々、此牧羊者は「サア一同で神の聖子を拜しに行かうでは無いか」と申しました。
 それから、一同でベツレヘムにと駈着けまして、例の旅館の馬小舎に這入りました。
 嬰兒は秣槽の中に眠り、マリアとヨセフは其傍に坐りました。牧羊者は「これこそ神の聖子です。天使が今夜私等に左様云ひまして、居らつしやる場所迄教へたのです」と申しました。此牧羊者が、天使の事と神の聖子の事を話すのを聞いて、ベツレヘムの人々は一同大變に驚きしました。

第十五課 博士等 (太二〇)

ベツレヘムからはズツト隔離た場所に、數人の利發富豪が住居で居ましたが、此人々は神様が聖子を嬰兒として御遣はしに成つた事は知つて居ました、けれども何處へ行

つたら拜する事が能ものか判断ませんでしたので、神様は空中に一つの美しい星を御置きに成つて、其星がイエスの居られた場所へと移動く様になさいました。
 それ故博士等は自分の家を出て、長い旅行へと出立しましたが、先づ第一に「神の聖子は王で居らつしやるのだから、何か献上物を持つて行かう」と云ひまして、黄金と好い香氣のする物を持つて出掛けました。
 星を目標に歩行て往きましたが、やがて其星はベツレヘムの某家の上で止りました。
 博士等は、神の聖子を拜し度いと熱望で居ましたのですから、非常に喜びまして、家内に這入りました、マリアに會ひ又嬰兒のイエスを拜しました。博士等は跪いて、神を讚美、神の聖子又王と呼稱しました。
 持て來た献上物を取り出して、イエスに献げました。
 アリアは貧乏でしたが、これで此嬰兒の爲に何か買ふ御金を得た譯でした。

第十六課 ヘロデ王

(太二〇路二〇五一、五二)

當時ヘロデと呼ぶ大變に兇惡い王が在りまして、ベツレヘムの近處に住で居ましたが、ベツレヘムに一人の嬰兒が生れて、或民は此嬰兒を王と云つて居る事を聞きました。ヘロデ王は、自身の以外に王と呼ばれる者が有るなごは、勿論好無いので、それが又神の聖子で有らうとも承知の不能事でした。それで「此王と呼ばれて居る嬰兒を殺して了はう」と云ひました。ヘロデは此嬰兒のベツレヘムに在る事丈は知つて居ましたが、ベツレヘムには澤山嬰兒が居るので、何の兒が王と呼ばれて居る兒か、一向に知りません。或者は知つても居ましたけれど、知つて居る程の者は、イエスを愛して居ましたから、ヘロデに告らせる様な事は致しません、夫故非常な兇惡思想がヘロデの心中に浮びました。

「何でも、ベツレヘム中の嬰兒を殺す殺して了はう」と思ひました。諸子、神様は聖子をヘロデに殺させる様な事をなさると御思ひですか。其様事はなさいません。神様はヘロデが如何な事を爲る積かと云ふ事も御存じて、ヨセフが睡つて居る處へ、輝いた天使を御遣しに成りました。

天使は「悪い王は此嬰兒を殺さうと思つて居る。起よヨセフ。マリヤと嬰兒を連れて遠方を往け」と申しましたので、ヨセフは急いで起きて、自分の驢馬を曳出し、之にマリヤを乗せ、マリヤは嬰兒を抱いて出掛けました。此時は暗黒つたので、出立く處を誰も見ませんでした。

翌朝數人の男が刃を持つて來ました。ヘロデが遣したのです。これは嬰兒を塵殺すのでした。各戸に扉を開けて「此處に嬰兒が居るか」と聞きまして、母親から奪つて、殺して了ひ、母親は甚く悲くのでした。若し諸子が當時此市中を歩行たなら、女の泣聲と「可愛い嬰兒は死んで了つて、最早見る事は出來ない」と叫ぶ聲の外は何も聞れ

なかつたでせう。ではイエスは殺されたでせうか。
 否、遠方へ去つてお了ひになりました。イエスの御父なる神様が御遣りになつたので、
 神様は未だ、左程早く御死なせに成る思召で有りませんでしたから、流石のヘロデ王
 もイエスを殺す事は能ませんでした。
 其内にヘロデ王が死にましたので、神様は天使の一人を御遣になつて、ヨセフの寢て
 居る間に御言はせに成りましたには天「ヨセフよ、ヘロデは死にしぞ、故國に歸へれ」
 と云ふのでした。

それで、ヨセフは驢馬を曳、マリアと可愛い幼児のイエスを伴て、一同故國に歸つて
 來ました。

ヨセフは大工で有りました。イエスはヨセフとマリアと相與に住んで、何でも兩人の
 言ふ事はよく納かれました。誠に利發な子供で、神様に就いて種々と考へるのを好ま
 れました。御父なる神様は彼を愛され、誰でもイエスが柔和く親切で居つしやつたの

で、皆々愛いて居りました。御生長なられるに従つて、益々彼等が可愛がる様に成り
 ました。

第十七課 試 (太、四、一—十二)

終にイエスは成人にられました。御自分は諸處を巡ぐつて、人民に神様の事を教へ
 なければ成ら無いと云ふ事は能く知て居られました。先最初に單獨で野に行かれま
 した。其野と云ふ場所は、睡やうとて家屋は無し、談話をする友も無く、食る物も無
 くて、夜間は寒く、日中は實に暑いのでした。

其處には人間は居無いで、獅子だの、狼だの熊の様な猛獸ばかり居まして、夜に成る
 と吼るやら咆くやらするのでした。イエスは御父を信じて居られました。

又四十日四十夜の間、何も食られませんでした。神様は生して御置に成りまし
 た。イエスが單獨で居られた時、第一心中で懐しい御自身の御父に談話をなさいまし

た。
 やがて誰だか一人来て話し掛けましたが、其人は何人でしたらう。
 人間でも無く、輝いた天使でも無く、神様でも無く、其はサタナで有つたのです。如
 何様子をして居つたかは分りませんが、兎に角イエスに悪い事を爲せ様又御父の神様
 に背かせ様と試に來たのでした。

サタナは、イエスが飢えて居られるのを知て居ましたから、此等石をパンに變化せて
 御覽なさい」と申しましたが、イエスは神様が御自身で食物を下さると御約束なさいま
 したから、其様事はなさいませんでした。

次にサタナはイエスを、或る會堂などよりはズツト高い、大きな建築物の頂上に伴て
 行きました。元來何でも大變高所の頂上は恐ろしいもので、頂上から下部を見下すと、
 誰でも戦慄て來ます。

サタナはイエスに對つて「サア此處から下へ御飛びなさい、世話をすると御約束なさ

つたのですから、必然御父は貴殿に損傷の無い様にさせる爲め、天使等を御遣に成り
 ませう」と云ひました。

諸子、萬一イエスが此時、御飛降りになつたとしたら、正當事を爲つたのでせうか。
 イエスは萬一御自分が飛び降りれば、御父の御心に合は無い事を知て居られました。

イエスは常時御父の御心に合ふ様な事を爲いました。今度は、サタナはイエスを大變
 に高い山の頂上に伴て行きました、花園だの、家屋だの船舶だの、馬車だの、美麗
 衣服だの、御馳走だの、それは、此世の中の盡頭と云ふ美麗物を見せまして「彼の
 立派な物を御覽なさい。私は貴下に彼を悉皆差上ります。只鳥渡跪いて、私を神様と呼
 びさへすれば、此世は總て悉皆貴下の所有に成るのです」と申しました。けれどイエス
 は「私は自分の父様に祈禱ります、汝には祈禱ません」と云はれました。
 イエスは此世の何よりも一番に、御自分の父を愛されました。

アダムとエバはサタナの云ふ事を聽從て、神様に反きました。イエスは御父の御

命令は悉皆其通になさいました。アダムは不従順で、イエスは従順で有つたのです。それから、やつとサタナは去つて了つて、此度は天から天使等が来てイエスに食べさせました。

サタナは諸處遍歴つて子供連を悪くし様として居ます。獅子は單身體を食べるだけですけれど、サタナは諸子の精神も身体も自身の物に爲て了ふと欲つて居るのです。併し神様はサタナより有力いのです。諸子、神様に

「サタナの言ふ事に従はない様に助け給へ」と仰しやい。すると神様は諸子を助けて下います。

第十八課 十二使徒 (可、一〇十六—二十)

イエスは成人なられてから、御父の事を人民に教へて御歩行になりました。イエスは度々説教をなさいました。

如何場所でなさいましたらう。

或時は會堂の様な場所でもなされ、又或時は野原の様な場所でもなされ、時には小山の頂上に坐つて、又或時は船の中に居て、水の岸に人々を立ててなされた事も有りました。イエスは常時同一場所には御住居になりませんで、彼方此方と諸處巡回つて居らつしやいました。それで、イエスは單獨で御巡歴に成つたのでせうか、否、當時十二人の御友が御同伴でした。此等の人々をイエスは十二使徒と御呼びになりました。

其内の一人はペテロで、今一人はヨハ子、又ヤコブだとか、トマスと呼ぶ人も居ましたけれど一度に悉皆申しても御忘れに成るといけませんから名は此位にして置ませう。ペテロは漁夫でした。小舟を所持して居て、晝の間も亦夜なども漁をして居ました。ヤコブ、ヨハ子も各自舟を所持して居て、矢張魚類を漁て暮して居ました。

或日イエスは此人達の舟の傍を通過になつて、ペテロと其兄弟のアンデレが魚類を漁るので網を投つて居るのを御覽に成りまして「一緒に來い」と仰しやいますと、ペテロ

もアンデレも、綱や舟を捨てイエスに従って行きました。それから、イエスは又少し御進みに成ると、ヤコブとヨハナが各自に舟の中に坐つて、綱の破目を修理して、居るのに御會に成りましたが、此人連にも「一緒に来い」と仰しやいますと、此人連も亦綱など捨てイエスに従って行きました。

イエスは御自分の御氣に召した人連を、一緒に来る様に御呼びに成りました。

イエスは何故十二の使徒と一緒に居る様になさつたか御話しませうか。マア、諸子は何故と御考になりませう。

それは斯様理由です。御自分の父なる神様の事を委しく教へて置て、他の人等に教へられる様にし度と欲はれたからです。此人等はイエスと共に居て、イエスの御言葉を聞いて居る事を喜んで居ました。諸子はイエスと常時一緒に居度と御思ひですか。

此使徒等丈がイエスと共に居る時に、種々と神様や天の事で、秘事を話して御聞せになりました。彼等實にイエスを慕て居りまして、師とか主とか呼んで居ました。イエスは

彼等が慕ふよりも餘計に彼等を愛して居らしつて、彼等の事を友と呼ばれました。

イエスは常時御自分の所持物は何でも分配して遣つて居られましたけれど、住居家屋も所有して居られず、御金も僅少しか所持して居られませんでしたから、一同遠路をして非常に疲勞たり、又飢たり渴いたりした事も度々有りました。けれども、親切な人等が有つて、度々自分等の家に招待で食べさせた事が有りました。其他の人々はイエスの事を嘲笑して種々な罵詈雑言を云ひました。

それで、此使徒等は善人々でしたらうか。矢張私等と同様に悪いのでした、けれどイエスは彼等の中に御自分の精神を御入れに成つて前よりも善良なさいました。でもイエスの様な善良のでは有りませんでした。度々喧嘩をしたり又時には可憐な人にも不親切で有つた事も有りました。

(使徒とは即ち御弟子の事です)

第十九課 最初の奇蹟 (約十一、一二)

或人は自分の家へイエスを招待と云ふ事を御話しましたが、これから實際に御招待申した人の事を御話致ませう。此人は饗宴をしまして、イエスは其饗宴に御出に成りました。其處には、イエスの母の MARIA も居られましたし、使徒等も居りまして、其他にも多數の人が来て居りました。衆人に飲ませる葡萄酒も有りましたけれど、ホンの少量で有つたので、少時に悉盡つて了ひました。

イエスは葡萄酒の盡了つたを御存知でした。イエスは尙と葡萄酒を衆人に與る事は能なかつたでせうか。それは能ました、此世界を創造其中の凡の物を御創造になつた程ですもの。室内には、大きな石で製作した瓶が三つ四つ有りました。イエスは下僕に「彼の瓶に水を入れよ」と仰しやいましたので、其通りに一溢に水を入れしました。

するとイエスは「それを汲んで、御主人の處へ持つて往け」と云はれましたので、下僕は又其通に致しましたが、イエスは水を酒に變化になつたのでした。主人は其酒を飲んで見て、何と云ふ良い酒だろう、何處から持つて来た」と問ひますと下僕は、イエスが瓶に水を入れよと云はれた事を逐一話しました。それで其饗宴に居た者は、イエスが水を酒に變化した事を知りました。此事が、イエスのなさつた最初の不思議な事で有つたので、此様事を奇蹟と申すのです。イエスは何故奇蹟を行ひましたらう。

其理由は、御自分は神様の聖子で有ると云ふ事を衆人に示る爲で有つたのです。それで、使徒等も確に此方は神様の聖子であるとして理解る様に成りました。

第二十課 奇蹟 (可七、路六、十七、十九)

イエスは水を葡萄酒に御變化に成つてから、澤山の不思議な事をなさいました。盲人

を視える様になさつたり、啞の口が利ける様になさつたり、跛の人が歩行る様になさつたりなごしました。

何處へでもイエスが行つしやると、周圍は病人で群集でした。

イエスは邪魔だからなご、御退けにはならず、各個悉皆癒して御遣になりました。一人の盲を御癒しになつた方法は此様でした。イエスは只「見よ」と仰しやつた丈けで、其瞬間から、其人は見える様に成りました。

それから、聾で啞の人を御癒しに成つた時は、イエスは御自分の指を耳の中に入れ、又舌に觸り、天に在になる御父を仰見られて「啓よ」と仰しやいますと、言下舌の絡がゆるんで、自由に口が利ける様に成りました。

或時イエスは、臥床の上に寐てゐる可憐な病人を御覽になつて「癒り度いか」と御問に成りますと、病人は何卒癒り度いと思ふと申ました、するとイエスは「起きて臥床を執つて歩行め」と仰しやいました。其病人は起きて見ましたら起き得れました。そ

れはイエスが起さる丈けの力を御與へになつたからでした。

又或時はイエスが會堂の様な場所で御説教を爲し居らつしやいますと、頭を擧げる事が出来ない程に脊柱の曲つた、一人の可憐な女が居りました、イエスは其女に「女よ、病氣は癒つた」と仰しやつて、御自分の手を女に御觸になると、忽に脊柱が眞直になつて、神様を讚美し始めました。

或時は又、死人を蘇生らせになつた事も有りました、これは、病人を癒したよりも猶不思議な事でした。

一日イエスが某路を歩行て居らつしやいましたが、其後からは大勢の人々が、イエスの奇蹟を見、又御話を聞かうと思つて従いて來ました。數人の人が此死人を擔いで、今埋葬に行く途中に邂逅しました。

其後からは大層泣いてゆく可憐な一老婆が有りました。此人は其死者の御母で、死んだ者は其一人息子でした。イエスは其状態を御覽になつて、大變氣の毒に思はれ、傍

に寄つて「泣くな」と仰しやつて、それから手を伸べて「若者よ、起よ」と仰しやる
 と、青年は起き直つて、口を利き始しました。イエスは老婆に「此處に汝の息子は居
 る」と申されました。
 見て居た人々は吃驚しまして「これこそ神様の聖子に相違無い、死人さへ復活らせら
 れるでは無いか」と云ひ合ひました。

第二十一課 罪人シモン (路七。三六一―五十一)

イエスは何の故に此世に居つしやいましたらう。我等を救ためです。
 では、神様は何故人間は死ななければなら無いと仰しやいましたか、それは誰でも悉
 皆悪いからでした。

イエスは人間の罪惡を赦し、又善良なざる事が能ます、けれどもイエスは、自身で惡
 いと思はぬ人々は御赦になりません。これから、悪いと思はなかつた驕慢た人と、惡つ

たと後悔した可憐な女との物語を致ませう。

一富者が、イエスを食事に招待だ事が有りました。イエスを慕いもして居無いのに、
 何故招待だのでせうか。それは只、イエスの御話か聞き度つたからです。けれどイエ
 スは行くと仰しやいました。

此富者は、イエスを大變不親切に待遇しました、脚部を洗ふ水も出さず、芳香の膏も注
 かず、接吻も致ませんでした。

すると今迄惡事をして居つた一人の憐な女が、イエスの其富者の家に這入て行かれる
 のを見て、後から来て、種々自分の惡事を後悔して泣き始しました。此女はイエスが自
 分を御赦になる事を知つても居ましたし、又イエスを慕て居たのです。

此女は香膏の箱を持つて來ました。それでイエスの前に屈身しましたが、涙は御足の上
 にホロ／＼と降下しました。女は其涙で御足を洗ひ、自分の長い髪の毛で拭き、それから
 携て來た香膏を其上に注ぎ、御足に接吻を致しました。

富者は女を見て、其悪いのを知つて居ましたから怒りました。又イエスが其様悪女に御親切なのを見て、腹を立てました。

併しイエスは此驕慢た人に仰しやるには、「成程此女は、今迄悪い事を爲て居た、けれども私は赦したので有つて、此女は又、私を大變に慕つて居る。汝よりも余程此女の方が私を愛して居る。汝は足を洗ふ水を呉れなかつたけれども、此女は自分の涙で私の足を洗つた、汝は私に接吻しなかつたけれども、此女は此處に這入て來てから、私の足に接吻のし通して有る、汝は又、何も香膏を呉れなかつたが、此女は非常に芳香の膏を私の足に注いだ。」

それからイエスは女に對つて親切な調子で「汝の罪は赦された」と、仰しやいました。これでイエスは此憐な女を御慰めになりましたけれども、其富者と其處に居た其富者の友人とは、前よりも獨立腹致しました。諸子も、自分で悪かつたと思つて、御願ひすれば、イエスは矢張赦して下さいます。け

れどもイエスは驕慢た人は嫌忌ですから、自分は善良人だと思つて居ては、決して御赦には成りません、諸子は未ホンの幼少な子供ですけれども、随分度々悪い事をして居らつしやるのですから、天國に行かれる價値は無いのです。それですから、御赦下さる様に、イエスに御願なさらなければ不可ません。諸子の心中に聖靈を御入れ下さつて、自分の罪を悪つたと思はせて下さる様に御願ひになれば、イエスは必然、丁度前の女の様に、諸子も赦して下さいますから、諸子は又、彼女の様に、イエスを愛さなければ不可ません。

第二十二課 海中の暴風雨 (路、八〇二二—二五)

イエスは度々使徒を伴つて船中に行かれた事が有りましたが、ペテロもヨハナも、各自に自分の船を所持して居て、イエスに貸すのを喜んで居ました。或時、一同で船中に居りましたが、風が烈しく吹いて來て、浪が高く、船の中迄打込

んで来ました。使徒等は溺没はしないかと恐怖りました。
 先刻から、イエスは睡つて居られました、枕をして横臥になつて居られます。風の音も浪の音も一向耳に入らぬと見えて、まだ寝て居られます。
 使徒等はイエスの許へ走けて行つて、大聲に「師よ、私第を御介意になりませんか、御死なせになるのですか」と叫びました。
 其時イエスは起き直つて、風に「風よ静まれ」又浪にも「静まれ」と仰しやいました。すると風は吹き止み、水は滑かに静になつて了りました。
 それからイエスは使徒等に對ひ「何故恐怖がつたか。私が汝等を注意ると何故信じなかつたか」と仰しやいました。
 イエスは一同が動搖て居たのも能く御存じで又睡つて居られても、一同を保護事は可能になつたのでした。
 使徒等は相互に「イエスは神様の聖子で有る風や浪さへ服従ふ」と云ひました。

第二十三課 ヤイロの娘

(路八〇四—五六)

一富者がイエスの許へ來まして平伏して申しますには「私には一人の小さい娘が御座います、現時大變病氣で居ります。何卒御出で下すつて御癒し下さい」と云ふ事でした。
 イエスは其富者と同行されましたが、其家の近處迄行きますと、下僕が數人來まして「嬢様は死亡て了りました、最早誰も癒す事は不能ません」と申しました。
 けれどもイエスは「心配には及ばない、私は癒す事が能る」と仰しやいました。
 それからイエスは、其娘の兩親に「私と共に家内にお這入り」と曰はれ「ペテロ、ヤコブ、ヨハ子は這入てもよいが、他の者は這入ては不可ない」と仰しやいました。
 それで六人は、娘の臥床ある室内へ這入りました。少女が死んだと云ふので、室内には大勢の人々が、悲哀の曲を弾いたり唱つたりして居りましたが、イエスは「泣くのを

止めよ、少女は死んだのではない、只睡眠で居るので有る」と仰しやいました。イエスは直に再生らせる心算でしたから、睡眠で居るのだと仰しやつたのです、けれども人々はイエスを嘲笑て「死んだのだ」と云ひ、イエスが再生らせる事が能やうとは信じませんでした。

イエスは「此人々は室外ださなければ不可ない」と仰しやつて、外部へ出して丁つて、扉を閉めて御了ひになりましたが、兩親と、ペテロ、ヤコブ、ヨハンは矢張室内に御置になりました。イエスは少女の手を執り「起きよ」と仰しやいますと、先づ起直り、それから臥床から出て、室内を歩行き出しました。此少女は十二歳でした。イエスは其時「何か食物を携て来て遣れ」と仰しやいました。此事實を見た、兩親は非常に吃驚きました。

第二十四課 パンと魚

(可十四。一三一—二二)

或時イエスは使徒等を率れて野に行かれましたが、大勢の人々は後から從て行きました。イエスは此人々に説教をなさいまして、御父の事や、御自分が如何様にして此世に、人々をサタナから救ふために來たか、なご、云ふ御話をなさいまして、一同は終日聽いて居りました。

漸々暗くなつて來ましたので、使徒等はイエスの許へ來て「漸々晩くなりますから、一同を御返しになつたら如何ですか」と申しました。けれどもイエスは、一同が終日何も食事に居るのを知つて居られますから、疲勞で飢ゑて居る儘で御返しになる事を御好になりませんでした、それでイエスは「食させる事は不能ないか」と仰しやいました。

使徒等は「否迎も不能ません、僅パンが五と小さい魚が二つほか御座ません、それに彼の多勢の群集を御覽なさいまし」と申しました。けれどもイエスは「一同を草の上に坐らせ、其パンと魚を私の許へ携て來い」と仰しやいました。

使徒等は一同を坐らせましたが、人の數は普通の會堂なら四十位にも這入り切れ無い程でした。何しろ女の人や子供は數へ無いでも五千人でした。マア小さい子供等は、如何に疲勞れて居た事でせう、丁度最早晩食を食べて寝る時刻でしたもの。

それでイエスは如何して此大勢に御食させになつたかを御話致ませう。

一同は青い草の上に坐りました。イエスはパンと魚を執り、最初に御父の方を仰ぎ見られて、食物の爲めに感謝を仰しやり、それから一片をペテロに渡し、「彼處の人々に食させよ」と仰しやりました。此様に使徒等各自に、パン一片づゝと魚少量づゝを渡して、人々に食させる様にお言付けになりました。

それは少數ばかりの人數なら、一片位でも充分でせうけれど、イエスはそれで此大勢の人數に御食させになつたのです。誰も彼も一同充分に食て、殘餘の小さな屑は草の上に落ちて居ましたが、イエスは使徒等に「籠を持つて行つて彼の屑を拾へ」と仰しや

いました。拾つたパンの屑は、十二箇の籃に盈溢でした。それからイエスは一同を家へ御返しになりました。

イエスのなさつた事は實に不思議では有りませんか。併し諸子、これで諸子の様な小さい子供でも、亦此世の人は誰でも、イエスは御食させになると云ふ事が分解しましたでせう。

何して諸子に食させて下さるでせう。

御飯を下さいます。

御飯は何ですか。あれは米です。

米は何から製たのですか。稻からです。

稻は誰が創造ますか。それは神様です。

それで神様は、何で御創造になるでせう。何でもありません。神様は何からも物を御造りにはなりません。イエスは神様で、稻を創造になるのです。ですからイエスは

諸子に食させて下さるのです。萬一田畑に稲を生させて下さらなかつたら、私等は一同死で了ひます。けれども私等の事を御忘れになる様な事は有りません、小な鳥類へ記憶て居らつしやるのです。

鳥類は別に耕作したり、穀物を收穫たり、納屋に藏たりする事は不能せんけれども、神様は飢させる様な事はなさいません。鳥類は神様を呼ばれば、其聲を御聞きになつて食物の見付る様にして下さいます。我等には靈魂が有りますから、神様は、鳥類等よりは餘程我等を御愛しになつて居らつしやいます、ですから、御祈禱をすれば、確に聞いて下さるのです。

諸子、毎日神様に「我らの日用の糧を今日もあたくしへ給へ」と云つて、御飯を下さる様に御願ひなさいませんか。

我等は食物の爲に一々神様に感謝を申す筈です。朝でも晝でも晩でも、御飯を食く前には「主よ、此好き糧の爲に謝し奉つる」と仰しやらなければ不可ません。

第二十五課

イエスの仁慈

(太一五。二一—二八。可十。一三—一六)

使徒等は往々には不親切な所爲が有つた事は前に御話しましたが、イエスは常時御親切でした。

或時、憐れな女が、イエスの後から「主、私の小い娘は大病で御座います」と云つて泣きながら従いて來ました。イエスは最初は返詞をなさいませんでした、使徒等は不親切にも、早く追ひ返されば宜い、と思つて居ました。其内益々大聲で叫はるので、使徒等は「追ひ返して下さい」とイエスに申しました。憐れな女は、イエスの足下に平伏して「主よ、助け給へ」と申しました。イエスは如何にも氣の毒に思はれ「汝の欲む事を爲て遣る」と仰しやいました。

此言を聞いて、女は喜び、家に歸つて見ますと、娘は至快で居ました。又或時は、使徒等が幼兒等に不親切な事が有りました。或る貧乏な女等が子供をイ

イエスの許へ携れて来た事が有りましたが、使徒等は周圍に集つて居て、近くに寄せつけず、「御歸り、幼兒などを携れて来て、私等に世話をやかしては不可ない」と申しましたが、イエスは「幼兒を私の方へ來させよ、追ひ遣つてはならぬ」と仰しやいました。

それからイエスは、幼兒等を擁き上げて、手を置いて、御父に祈り、祝福なさいました。イエスの御腕に擁かれるとは、如何幸福な子供等では有りませんか。

イエスは柔順な、優しい子供が御好きです、其様子供は、イエスの小羊です、イエスは又、其牧羊者で、死ぬと天國へ携れて行つて下さるのです。

第二十六課 主の禱 (太、六。九—一三)

イエスは此世に居らつしやる時分、天に在す御父の事を御考へになることを喜んで居られました。御父に御禱を捧る爲めに單獨で居られる事を好まれました。そして御禱な

さつて居る間、涙が頬を傳つて流下た事なども度々でした。

或晩、イエスは高岳の上で單獨で終夜御禱をなさつた事も有りました。

イエスは、時には使徒等が側に立つて聞いて居る處で、御禱をなさる事なども有つたのです。

如斯で、或時、イエスが使徒等の聞いて居る處で御禱をなさいますと、使徒等は「祈禱事を我等にも教へて下さい」と申しましたのでイエスは一つの短い禱を御教へになりました。それは「天に在ます我らの父よ。願くは聖名を聖となさしめ給へ。聖國を臨らしめ給へ。聖旨を天に於る如く地にも行はしめ給へ。我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。我らに罪を犯すものを我ら赦す如く我らの罪をも赦したまへ。我らを試に遇せず惡より拯ひ出したまへ。國も權も榮も世々に父の所有なればなり」と申のです。此禱は定めし諸子も御存じの御禱でせう。けれど誰が最初仰しやつたか御存じでしたか。それはイエス、即ち我等の主でした。それで此禱を「主禱」と申すのです。

イエスが仰しやつた御禱ですから、誠に善い祈禱です。けれども子供には中々理解が
六かしう御座ます。

「聖名を聖となさしめ給へ」と云ふのは如何理由でせう。

神様の聖名の讚美らるゝ様に、と云ふ事です。それから「我らの罪をも赦したまへ」
とあります通り、諸子も各自の罪を御赦下さる様に、神様に御願になるのです。

諸子は單獨で居らつしやる時に、祈禱をなさつた事が有りますか。

神様に祈禱をなさるのは、家内でも庭でも何處でも宜いのです。

又夜中でも、眞晝でも、何時でも介意いませぬ。

それから、丁度諸子が父上に御願になる様に何でも神様に御願になつて宜いのです。

諸子は、何を御願になりますか。食糧や、衣服や又は住む家を下さる様にと、御願に
なりますか。

左様です。其通御願なさい。併し第一番に、神様に聖霊を下さる様に願はねば不可ま

せん。聖霊を所持ことは、有りと有らゆる手遊や、金子や草花や又世界中の美しい物を
所持たよりよいのです。

何故其様によいのでせう。

聖霊は諸子を、丁度天使等の様に、神様を愛する様にし、又永遠生きられる様にする
からです。

諸子、次の短い祈禱を、神様に仰しやいませんか。

「父よ、聖霊を私に下さる事を、キリストによりて希ひたてまつる」

第二十七課 イエス死を豫言せらる (太、一六〇二一—二八)

イエスは何でも、如何なるかど云ふ事を知つて居られましたから、御自分の近頃死
な、ければなら無いと云ふ事も御存じでした。

種々秘密の事も使徒等には屢々御話になりました。それで、或時他の人の來無い塲所

へ連れて行かれて、仰しやるには「私も近々に居無くなる。悪人は私を捕へ、縄で縛り、笞ち、嘲笑ひ、十字架に釘けにする。けれども私は再直に蘇生る」と云ふ事でした。

使徒等は、イエスを大變愛して居ましたから、此様風に死ぬ事を話されるのを、聞くに堪へられませんでした。それで一同は眞に悲い顔をして居ましたが、ペテロが「死ぬなどいふ事は御座いますまい」と云ひますと、イエスは「私は人間を救済ため又御父の聖旨に稱ふ様に死ななければならぬのだ」と仰しやいました。

御父はイエスを死なせ様と御思になり、イエスは又、御父に逆ふとは思量になりませんでした。

イエスを殺さうと計畫で居た人々の多は、エルサレムと云ふ大都會に住居で居ました。イエスは屢々、エルサレムに往つて、説教をなさいました。

何故イエスを嫌つた人が有つたのでせう。それはイエスが人間の間違で居る處を云つ

て御聞せになつたからです。

常時人々に對つて「汝等是我父で有る神様を愛さないで、倨傲て自慢ばかりして居る。汝等は私を殺たいと思ひ、又貧乏人などに不親切で有る。汝等は神様を愛する似はするけれども、祈禱をして居る間も、自己の善良と云ふ事を思つて居るので、汝等の心中は悪事で盈溢になつて居る」と云はれました。イエスは如何かして、此様人々の心を悪から離れさせ度いと御思になりました。御父を嫌ひ、自分等の悪風を止め無いのを見て非常に御歎になりました。

悪人等は却つて暴怒て「神様は貴下の御父では無い」と云ひましたが、イエスは「神様は私の御父で有つて、私は神様の在しやる天から降下ので、其内再天へ歸るので有る」と申されました。

遂に人々は石を拾ひ上げて、イエスに打つてかかりましたが、未だイエスは死ぬ時で有りませんでしたから、容易に逃れて、此人々の發見られない所へ往つて了りました。

た。
其處に、イエスは使徒等と共に長時間留まられました。

第二十八課 ラザロ (約一一〇—一一七)

イエスは或場所に使徒等を伴れて留つて居られました。
イエスを殺し度と思つて居た人々は、如何しても捜されませんでした。イエスの味方であつた人々には、何處に居られるか、判然分明て居ました。
イエスには、使徒等の他にも猶味方が有りました。其内にラザロと云ふ人が有りました。其人は、二人の姉妹が有り、名は、マルタとマリアと云ふのでした。此兄弟三人は一處に住んで居て、一同イエスを愛し、又イエスも此三人を愛して居られました。それで、イエスは屢々此家へ御出になつては、談話をなさりました。其様時に、マルタは骨折て何か御馳走を造へてイエスに饗げ、マリアは常時御側に坐つて、御話を

伺ふのが好きでした。

其内ラザロは大病になりました。

無論マルタもマリアも兄弟のラザロを大變に愛して居たのですし、又イエスはラザロの病氣を癒して下さる事も知つて居たのですから、使を遣つて、ラザロが病氣だと云ふ事をイエスに告せました。

使はイエスを尋ねて、遠方まで行きました其間にラザロは漸々危篤くなつて、終死しました。それから二人は、ラザロを墓所に入れました。

マルタとマリアはイエスの來られるのを、頸を伸して待つて居ました。

四日経過から、やつとイエスが來られました。マルタもマリアも、此様長く経過事ですからいくら、イエスでも、ラザロを生す事は不能まいと思つて、地上に坐つて泣いて居ました。マルタはイエスの足音が近處に聞えて來ますと、イエスの許へ行つて「貴下さへ御居になつたなら、我の兄弟は死は致さなかつたで御座いませう。けれど、今

でも猶蘇生らせて下されませう」と申しますと、イエスは「汝の兄弟は蘇生る」と仰しやいました。

マルタは「ハイ、死者が一同復活る、最終の日には、必然蘇生るだらうと思つて居りました」と申しました。

マルタは、イエスは其様直に、ラザロを蘇生らせる心計は有るまいと思ひましたが、蘇生らせる事が能るとは知つて居たのです。

それからマルタは家に歸つて見ますと、マリアは未だ、大勢の知人に取圍れて地上に坐りて居りました。

マルタはマリアの耳に口を寄せて、イエスが呼んで居られる事を話し、兩人で出て行つて見ますと、イエスは道傍で兩人を待つて居られました。

マリアと一所に居た知友も、兩人に従いて行きて、泣きました。マリアも亦、大變に泣きましたが、イエスを見ると、足下に平伏して「主よ、もし貴下が御居であつたな

ら、ラザロは死には致しませんでしたらうに」と申しました。

イエスはマリアの非常な悲歎と、大勢の人の泣くのを見て、大變氣の毒に思はれ、御自分も悲しくなつて、深い歎息をされました。イエスは實に慈仁者ですから、誰にし

る不幸に遇つたのを見る事を御好になりませんでした。やがてイエスは「汝等はラザロを何處へ置いた」と御聞になりますと、マルタとマリア、又其友達は「居らしつて御覽下さい」と云つて、先に立つて案内をしました。

イエスは行く途中も涙は頬に傳つて居ました。遂に一同は墓所に来ました。墓所は一つの洞の様な場所、入口には大なる石が置いて有りました。

イエスは、石を除けよと、仰しやいました。マルタは、イエスが這入てラザロを見様と御思ひになるのかと思ひまして「洞の中にはに御這入なさいますな。既四日も経過居りますからと、申しましたが、イエスは、御自分が蘇生らせると云ふ事を、信じて居る様にと仰しやいましたので、始めて一同は石を轉せて除けました。

其時多勢の群集は、何を爲るだらうと怪みながら、イエスを見て立つて居ました。

可憐相に、マルタもマリフも、何卒ラザロが蘇生る様にと希つて居ました。すると、

イエスは大聲で「ラザロよ出て来い」と仰しやいました。

ラザロは死んで居たのですが、死者でもイエスの御聲は聞えるのですから、矢張聞え

まして、起上つて洞の入口まで歩行て来ました。ラザロは、手も足も顔も、委皆布で

包まれて居ましたが、イエスは「布を解け」と仰しやいました。

ラザロの顔を再び見た時、マルタとマリヤの喜はマア如何程で有りましたらう。主イ

エスの御親切に、如何程に感謝をいつたでせう。此等を見て居た一同は、驚いて「イ

エスは神の聖子に相違無い」と申しました。

第二十九課

イエスエルサレムに入る

(太、二一。一一一。一四一―一七)

イエスが爲つた奇蹟の中で、何が一番不思議でしたらう。四日も死んで居たのですか

ら、ラザロを蘇生させたのが一番でしたらう。

イエスを嫌つて居た悪人等も此事を聞きました。却つて益々嫌ひまして「何卒して

早く、殺さて了はなければ、今に誰でも神の聖子だと信じる事になつて了ふ」と云ひ

ました。

イエスは殺さうと盡力して居る事が知了になりましたから、此人々のわから無い場所へ、

再送れて御了になりました。それで一同捜しましたが、わかりませんでした。

併し、此小い静な隠所に、イエスは何時迄も匿れて居る事が能ましたらうか。それは

不能ません、我等人間を救ふ爲めに死に居らつたのですもの。只一時、死ぬ時の

来る迄待つて居られた計りです。

それから、イエスは弟子等に「我等は、エルサレムに往かなければなら無い、して私

は嘲笑れ答れ、殺されるで有らう。併し三日の後には、私は墓から出て来ると、仰し

やいました。

使徒等は此様事は聞くのが嫌でしたけれど、兎に角、イエスの往かれる處なら、何處へでも共に従うと決定しました。

イエスは路を急いで、やがてエルサレムに近寄りましたが、弟子の兩人に謂はれるには「これから少し先に行くど、撃がれた驢馬と其子どが共に居て、其傍には一青年が居るから、其驢馬も子も、此處へ牽いて來い、附いて居る青年は異存は言はぬから」といふ事でした、それで兩人の弟子は少し先の方へ往つて見ますと、成程驢馬が子と共に繋がれて居ました。それからこれを解き始めますと、傍に居た、青年は、何故解のですか」と問きますから、「主の御用だ」と云ひますと、青年は何とも言はずに貸して呉れました。

必然此青年は主イエスを愛して居て、物を貸して上るのを喜んで居たのでせう。

やがて兩人の弟子は驢馬と其子を牽て來て、自分の衣を取つて其上に置きまして、イエスは其上に御乗になりました。

エルサレムの人々も、イエスがラザロを蘇生させた事は聞て居ましたから、イエスを見様と思つて、多勢の人が出掛て來ました。人々はイエスを讃て「王」と呼び、衣を脱いで途に布いたり、側に生て居た木の枝を折つて矢張途に布いたりしました。

此様有様で、イエスはエルサレムの大都に來られました。大勢の人はイエスを見に市中に走出して來て、小さな子供迄も讚美して「王」と呼びました。けれどもイエスを嫌つて居た、不遜な人々は、此讚美の聲を聞いて、非常に怒りました。イエスの讚美られるのが嫌であつたのです。やがてイエスの處へ來て、何故貴下は、子供達に「王」と呼せて介意ずに置きますか」と曰ひました。けれどもイエスは子供の讚美の聲を聞く喜びましたから、黙止るとは仰しやいませんでした。

イエスは子供等を愛され、又此子供等はイエスを愛して居たのです。

第三十課 殿

(路、一九。四七—四八。二〇。一九、二〇。二一。三七、三八)

扱、エルサレムには「殿」と呼ばれた大きな會堂の様な場所がありました。外部は白く、誠に美う御座いました。扉は開放しにして、人々は何時でも神様に祈禱をしながら這入て来るのです。これは神様の家にして、イエスは屢々御弟子等連れて此處に來られました。憐れな盲目だの跛だのは此處へ來て、イエスは悉皆癒して御遣になり、又御父の事など話して御聞せになりました。

小さい子供等は殿の内、讚美を唱ひ、イエスは終日神様の事を種々と御教になり、又人々はイエスの仰しやる事を聞いて喜んで居ました。けれど一方には、悪い不遜な人々が殿に來まして、イエスを嘲笑り、種々な失禮な事を言ひました、併しイエスは、柔和い事丁度小羊の様で、何も彼も悉皆忍耐して了りました。

夜になつてから、イエスは殿を去つて、市を離れた高い岳に往かれ、此處で單獨で、暗黒の中に神様に祈禱を捧げられました。

悪人共は如何かして、イエスを捕へて殺したいと思つて、如何したら捕へられるだら

う、とても人々が見て居ては、捕へられまい、捕へられる位なら、モウ我等は殿へ行くのだけけれど、ア、何處か暗黒な塲所に單獨で居れば宜い、そうすれば繩をかけて裁判官の許へ連れて行くけれど」と評議をして居ました。

第三十一課 ユダ (約一二。六。太二六。三、四、一四—一六)

イエスは十二人の弟子が有つたのですが、其弟子は、十二人共悉皆イエスを愛して居ましたでせうか。

ペテロでも、ヨハ子でも一同愛して居ましたけれど、僅一人、ユダと呼ぶ人丈は眞實に愛して居無つたので、只愛して居る似をして居たのでした。イエスは、ユダが悪人で有ると云ふ事を御承知したらうか。それはもう心の底までも見て取つて居らしたのです。併し他の弟子等は、ユダが常時一同と同様に、イエスに接吻したり、優く談話をしたり、神様の事などを口にしたりして居ましたから、矢張善人だと思つて居

ました。

處が、ユダは他に愛して居るものが有りませんでした。それは金で、澤山金が欲かつたので、ユダは貪慾で、盗人でした。弟子等は一つの巾着を持つて居て、誰でも金が有れば此巾着に入れて置きました、一同同一の巾着に入れて居ました。けれども一同貧乏でしたから着巾の中には常時金は少しはか這入て居ませんでした、其巾着をユダは常時預つて居まして、時々其中から幾許か出しては、自分の金にして居ました。でも誰一人此事を知つた者も無し、又盗人などは思ひも寄りませんでした、只イエス丈には判然知つて居られました。

ユダは常時「如何して金を得やうか、と云ふ事計り考へて居ました。一日のこと、不遜人が集て居る處へ、ユダが這入て來ました。

ユダの曰ふには「貴下等はイエスが單獨で居られる處を見付度のでせう、金をへ下されば、イエスが夜往かれる場所を御知らせしませう」といふのでした。

それから一同は「諾々金は興る」と曰ひますと、「では幾許下さいます」と聞きますから、「銀三十」と答へますと「宜しう御座います何日夜に、イエスの單獨で居られる處を報知せ申しませう」と曰ひましたから、悪い人々は大層喜びまして「今度こそは、イエスを捕へて殺せると思ひました。

ユダは又イエスの許へ歸りましたが、勿論自分のして來た事は、他の弟子等に話しませんでした、併しイエスは、ユダが晝となく夜となくした事は悉皆御存じで、如何事を思つて居るかと云ふ事さへ御承知でしたから、此事もよく知つて居られました。けれども御自分の此惡策を知つて居る事は、ユダには仰しやいませんでした。

第三十二課 最後の晚餐 其一

(路。二二。七一―四。約一三。一一―七)

イエスは弟子等に對ひ、私は最早直に殺されるのだけれど、其前にエルサレムで、汝等と共に晚餐を食やうと、仰しやいました。

それから又、ペテロとヨハ子には「晚餐の準備をして来い」と仰しやいましたが、兩人は「何處へ準備をして参りませう」と云ひました。これは、エルサレムには、イエスの家といふ處が無つたからでした、併しイエスは何も彼も用意して居られました。そこでイエスは兩人に「エルサレムに往け。すると瓶を持た人に遇ふから、其人の這入つて行く家に從て往け、其家の主人は私に室を貸して呉れるから、往つたらば、私は直に售されるので、弟子等と共に晚餐を食べたいのだと、主人に言へ」と仰しやいました。

それから兩人はエルサレムに来て見ますと、イエスの言に違はず、瓶を持つた人に遇ひましたから、ズン／＼從て行きますと、某家に這入りました。兩人は猶從て這入つて行つて其家の主人に「イエスは售される前に弟子等と共に晚餐を食べたいので、室が入用ですと、曰ひますと、主人は兩人を階上につれて行つて、中央にはテーブルが有り、其周圍には腰掛も有り、足を洗ふ瓶も有れば、茶碗もお皿も備つて居る大な

房に案内しましたから、ペテロとヨハ子はお飯だの葡萄酒だの又他に種々な物を求めて来て晚餐の準備を少し遠處に居られたイエスの所へ、準備の以來た事を申上に往きました。

夕方になると、イエスと弟子一同は此家に來まして、階上へ昇り、一同席に付きました、イエスは弟子等十二人の中で、ヨハ子を最愛して居られましたから、ヨハ子はイエスの次席に坐りました。

暫時晚餐を食べて居ましたが、やがてイエスは起つて手巾を取り、それを腰に纏け、瓶を取つて水を盤の中に入れ弟子等の足を洗ひ腰に纏つた手巾で拭きはじめられました、此様してペテロの許まで來られました、ペテロは、貴下は我の足など決して御洗になつては不可ません」と曰ひました。

ペテロの考へでは、イエスが恰下僕でも有る様に、我足など洗はるとは、餘り御親切が過ると思つたのでした。けれどもイエスは少しも不遜て居られず、又弟子等に親

切にされる事を好んで居られました。

イエスは答へて、若私が汝を洗なければ、汝は我と關係が無くなつて了ふのだ。併し最早汝を清潔にして了つた」と仰しやいました。これは、イエスがペテロの心を清潔になさつたのです。

これを聞いて、ペテロはイエスが我足を洗はれるのを喜びました。

ユダの外は、弟子等は一同清いな心を持って居ました。ユダの心は惡で盈溢でしたが、イエスは此ユダの足も、同様に洗れました。イエスは惡人のユダにさへも御親切でした。

イエスは悉皆一同の足を洗つて了つて、再坐つて話しをされました。

「我のした事が汝等には理解つたか。私は汝等の主又師で有るけれども、汝等の足を洗つた、私は此事によつて汝等が私の眞似をして、お互に親切にしあふ様にさせ度いと思ふので有ると、仰しやいました。

第三十三課 最後の晚餐 其二 (約、一三〇、二一—三〇)

諸子はユダが計畫で居た事は御存じでせう。イエスはユダが御自分を惡人等に售して殺させ様として居る事は宜く御存じでした。イエスは是迄常時ユダに親切にして居られましたが、相變らず此通り惡いのを誠に残念に思はれました。

それで、イエスは十二人の弟子等と共に食事をして居られましたが「汝等の中に一人、私を惡人等に售して殺させる者が有る」と仰しやいました。

弟子等は大變に悲しんで、ペテロもヨハ子も又他の者も各自に「それは私で御座いますか」と聞きましたが、イエスは誰とも仰しやいませんでした。

其時、ヨハ子は我頭をイエスの懷に倚せて居りましたが、ペテロは其耳に耳語いて「主の居られる場所を惡人等に報せるといふのは誰だか問つて御覽と」云ひました。

ヨハネは小聲に「誰ですか」と聞きますと、イエスは「私と共にパンを汁に濡る者

が其だ」と仰しやいました。

食卓の上には汗の皿が有つて、イエスが其中にパンを濡けられました時に、丁度一緒に濡た弟子が一人有りましたが、誰でしたらう。それはユダでした。それでヨハ子は誰が其大悪人かといふ事を知りました。

やがてイエスはユダに對ひ「汝の爲様と思つて居る事を爲よ」と仰しやいました。

ユダは起立て、室を出ました。何處へ往きましたらう。

悪人等を夜イエスの許へ連れて來る爲めに往つたのです。

それでもまだ、他の弟子等は、何か買物でもしに往つたか、又は貧乏人にでも金を與りに往つた事を思つて居ました。

第三十四課 最後の晩餐 其二

(太、二六、二六一三六。約一四、一一四。一八、一三)

夕餐が了つてから、イエスはパンを取つて小片さいて、一片づゝ弟子に與つて仰しや

るには「これは我身で有る。我は最早死ぬので有るから、これを食べて我の事を紀念

へ」

それから葡萄酒を杯に注いで「汝等一同此杯から飲め。これは我血で有る、我は血を流して死ぬので有るから、これを飲んで我の事を紀念へ」と仰しやいました。

イエスは又「最早是限我は汝等と共に食事はしない。我は父の許へ往くので有る。汝等を去らなければなら無い、併し再歸つて來ると」仰しやいました。

それから一同で讚美歌を唱ひました。

やがてイエスは食卓から起つて、階下に入り外部に出て行かれましたので、弟子等も一同従いて行きました。其時外部は眞暗で有りましたが、イエスは途中も弟子等にいろく話して行かれ、我は今夜捕れて行くのだが、汝等は一同我を離れて去つて了ふと、仰しやいました。するとペテロは、私は決して離れません、獄舎にでも御共に參ります。例命を捐るとも、決して貴下を離れは致しません」と申しました。

イエスは答へて「否々ペテロ、汝も離れて了ふ。今夜未だ鶏が鳴かない前に、我を識ない、友では無いと曰ふぞ」と仰しやいました。

(鶏の鳴かない前とは、夜の明けないうち、と云ふ意味です)

イエスは語を續いで、猶もいろくくと優しく弟子等に御話しになりました。

「我が去つて了ふとて左程に悲しむ事は無い、我は御父の許へ歸るので、再直に汝等の許へ来る、我が天國へ往けば、汝等の爲めに所を準備して置く、汝等は互に相愛ひなさい、すると我は聖靈を贈つて汝等を慰てやる」と仰しやました。

遂にイエスは某園に來られました。此處へは度々弟子等を連れて來られましたので、悪いユダは此處を知つて居ました。

ユダと云へば、今何處に居るのでせう。

悪い不遜人々と共に居るのです。

如何して此園に、悪人共の下吏を従へて來たかは、直に御話し致します。此悪人共は

へに、下吏を遣す計畫で有たのです。

第三十五課 園 太、二六。三〇—五七。約、一八。一一—二二

イエスは園に來られますと、弟子の中三人だけ御連れになつて、餘は一同、御自分の來る迄待て居る様にと、或場所に殘して往かれました。

扱御連になつた三人とは誰でしたらう。

ペテロとヤコブとヨハ子でした。

イエスは此三人を連れて、獨奥深く進んで行き、我は非常に哀い。これから祈禱をするから、汝等は此處に待つて居て、睡らずに、我の祈つて居る間、祈つて居よ」と仰しやいました。それから今度は單獨で又少し進んで往かれ、地に伏して、御父の御助を祈り始められました、其祈禱の最後に「父よ、我が欲ふ所を成やうとするのでは御座いません、爾が欲ふ所に任せて下さい」と、仰しやいました。

イエスは非常に熱心に祈り、又大變に哀しんで居られたので、祈られる間、汗は血の如に地上に落下しました、やがて起つて、ペテロ、ヤコブヨハ子の許へ来て御覽になると三人共睡て居ました、イエスは三人を起して祈る様に仰しやいました。二次離れて御父に、此大愛の時御助下さる様に祈られました、再加へつて来て御覽になると、三人共矢張睡つて居ました、第三次に往つて祈られますと、御父は天使の一人を天から御遣しになつて、慰さめられました。其天使は如何いふ事を言ひましたか分明せぬが、イエスを愛して居て、優しい言語で御父の深い愛などを話した事は確かです。併し長くは居ません、直に神様の許へ歸つて往つて了ひました。

再弟子等の許へ来て御覽になると、三人共獨睡つて居ましたが、イエスは三人を起して「ユダが近いて、来たからと仰しやいました。イエスが此様云つて居らつしやる間に、最早大勢の人が園の中を歩行て居るのが見えました。これはエルサレムの不遜者等の下吏等でしたが、一同手に々々刀や棒を持つて居ました。ユダは一同の先に立つ

て、イエスの在所を案内しました。しかも狡猾では有りませんか。恰で愛してゐる様に見せかけて、イエスの許へ寄つて来て、接吻をしたのでした。イエスはユダが、何の積で此様な事をするのか宜く御存じでしたから、ユダに對ひ「友よ、汝は何故此處へ来たか。何故我に接吻するか」と申されました。

イエスは逃などなさらず、却つて出て行つて悪人等に「誰を尋ねて居るのか」と聞かれますと、一同「イエスを尋ねて居るのです」と申しました。イエスは答へて「我が其である」と仰しやいました。

此様仰しやるが否や、神様は此悪人等を悉皆地上に仰向に倒してお了ひになりました。ですから、逃やうとお思ひになれば、充分逃られたのでした。けれどもイエスは罪人等の爲に死ぬ計畫で御止りになりました。

やがて悪人等は起上りました、神様が起上らせになつたからです、するとイエスは「若し汝等が我を捕たいとなら、此我の弟子等は容して去つて呉れなければ不可ない」と

仰しやいました。

イエスが此様場合にも、弟子等の事を御考へになつた事は誠に御親切な事で、弟子等は又恐怖がつて逃て往きたがつて居ましたので、イエスと共に残つて死ふなご、望んでは居ませんでした。

併し其中で、ペテロは劍を抜て、一人の悪人の耳を削落しました。ペテロは戦ひ度と欲んだのでした。けれどもイエスは「劍を鞘に鞆めよ、若し我が今父に祈るならば、父は天使を幾千人でも救助の爲めに遣しても下さるのだと。仰しやつて、其人の耳に解つて癒してお了ひになりました。

では何故、イエスは天使を遣して下さるやうにお祈りになりませんでしたらう。それは、我等を救ふ爲に死ふと欲はれたからです。萬一其時イエスを、天使が来て天に擲て往つて了つたなら、我等は最早それっきり、滅亡する所でした。

其内にペテロを始め弟子等は一同逃て去つて、了つて、イエスたつた一人悪人等の處へ置去りにして了ひました。

悪人等は繩を取つて、イエスの手足を縛り、エルサレムに曳往きましたが、イエスは丁度小羊の様に柔順く曳れて往かれました。

第二十六課 ペテロの否認

(太、二六、五七―七五)

イエスを忌み嫌つて居た悪人等は、終夜起きて居ました、自分等の下吏に兵卒を添けて捕に遣つたのでした、立派な家の中に室を取り圍んで評議をし、首尾よく捕へて來れば、宜いがと氣を揉んで居ました。相互に此様事を言つて居ました。「イエスが捕つて來たら、何でも殺して了はなければ不可ない、裁判官の許へ曳れて行かう」

遂にイエスは悪人等の下吏に曳れて此處に這入て來られました。これを見た不遜者等は喜びまして大い室の真中に立てて、荒々しく汝は神の子かと、言ひました。

イエスは「其通り、我は神の子で、後日天使と共に雲に乗て來るのを、汝等は見る日

が有る」と仰しやいました。

悪人等は大變怒つて、今の言語を聞いたか、裁判官の許へ曳れて行つて、殺して了はなければ不可ない」と言ひました。

此間 イエスは誠に優かに、一言も口を利れず控へて居られました。

弟子等は如何したのでせう。

一同逃て去つて了つたのです。

ペテロもでせうか、

命を捐ても共に従くと云つたのですが、矢張逃て了ひました。

其内心に「一つイエスの結局を見て來やう。悪人等が如何イエスを迎ふか見度いものだ」といふ念が起りましたから、ペテロは再エルサレムに引返して來て、其立派な家に至りました。

先づ廣間の許へ來て見ますと、悪い僕等は庭に火を焚て、其周圍に坐つて居まして、

廣間の扉は開放て有りました。それで、其戸口からイエスが見えて居ました。イエスは其處に悪人等の前に起立て居られました。

ペテロは何卒誰も、自分がイエスの使徒の一人で有る事を見付けなければ宜いが、と思ひました。見付つては殺されるからとビク／＼して居ましたが、僕等に混つて火に當つて居ますと、一人の婢が「お前さんはイエスの弟子です」と言ひました。

ペテロは吃驚して、否左様では、有りません。お前さんの云ふ其人は、私は知りません」と言ひまして、門口に出て行きました。又一人の婢が「確にお前さんはイエスの弟子だ」と言ひます。ペテロは再、否左様では有りません」と言つて再火の處に返つて行き、僕等を御話を始めましたが、其中にペテロを園で見たのを覚えて居るものが有つて、「お前さんは確にイエスの弟子に違ひない」とか「私は確に園でお前さんを見たもの」など、言ひ出しましたから、ペテロは左様でない由を誓ひましたが、未だ言語の了らない内に、鶏の鳴くのが聞えました。

其時始めて、先刻イエスが自分に言はれた事を思ひ出し、イエスの方を見ますと、イエスは顔を此方に向けて、ペテロを見て居られました。口には何も言れませんでした。が、其顔には實に。此が命を捐ても共に居ると言つた、其ペテロか。此が我に對する愛で有か。我を知らないと言ふのかと、言つて居られる様な容貌が有りました。ペテロは誠に、なさけ無い事に思ひまして、恰で自分の胸は破れる程に感じ、其家から出て、外部で甚く哭きました。實際ペテロはイエスを愛して居たのですけれども、只サタナが誘惑して、知らないなど、其様悪い事を云はせたのです。若しペテロが園に居た時、一睡つて了ないで、祈つて居たなら、多分これ程の事は無かつたのでせう。

併しイエスは幾度か、サタナに靈魂を得れない様にとペテロの爲に祈つて下さつたのです。

第三十七課 ポンテオピラト

(約、一八。二二―四〇、太、二六。六七―六八) 約、一九。一一―一六

イエスは大廣間の中に終夜起立て居られました。ペテロの言つた事も悉皆聞かれて、悲しまれました。それで悪人等の態度は恰で獅子か虎の如で、イエスは丁度小羊の如く有りました。

イエスが何か仰しやつた時、一人の下吏は顔を撲ちましたが、イエスは沈黙に堪へて了はれました。

夜中で有つたので、裁判官は未だ出て来ませんから、悪人等は朝まで待たなければなりませんでしたが、待つ間下吏等は、廻つて来てはイエスを撲たり、押したり、嘲笑つたり、中には顔に唾を吐き掛けた者さへ有りました。其の内天明たので、悪人等は「サア裁判官の許へ曳て行かう」と言ひ其立派な家を出て、イエスを集議所へ曳て行きました。

裁判官は市中の公廳の高座に坐つて居ました。此人の名はポンテオピラトと云ふのでした。裁判官はイエスの事を知りませんでしたから、「此人は何をしたのだ」と聞きますと、悪人等は答へて「自分を王様だと申します」と言ひました。

ピラトはイエスに對つて「汝は王で有るか」と聞きますと、イエスは「左様だ」と仰しやいました。併しピラトはイエスが大變善良人らしく見えると思ひましたから、罰し度ありませんでした。

すると悪人等は大騒動を始めて「十字架に釘よ」と叫びました。

ピラトは「否、私は苦つて釋さうと思ふ、それで充分で有る」と言つて、イエスを兵卒に渡し、兵卒は家の内に連れて行つて、結節だらけの索で撲ちました。此様刑罰が有つたのです。それでイエスの脊中からは血が流下て出ました。すると慘酷にも、兵卒等はイエスが自分を王だと言はれたのに、と言つて、嘲笑ひまして、着て居られた衣服を剥いで、王様の着る様な紫や緋色の美な袍を着せました。

それから「首に冠りが無くては不可ない」と云ふので、ピンの如に尖つた棘を編で冕を作へ、それを首に被らせ、又、王様は王節と云ふものを拒つものでしたから「王節も無ければ不可ない」と云つて、草を其代りに手に持せまして、其草を又取つて頭を撃ち、嘲笑ひながら其前に跪づいて「王よ、王よ」と言ひました。

ピラトは兵卒等が此様にイエスを苦めて居るのを見て、イエスを悪人等の居た市中に曳出して、一同に示せ汝等の王を見よ」と言ひました。

ピラトの考では、イエスが此様に慘酷に遇はれて、刺の爲めに額からは血が流れ、脊中は筈に撲たれて、肉破れ其上から嘲弄がましく立派な衣服を着られて居られる、此悲惨い御姿を見たら、少しは御氣の毒と思ふだらうと欲つたのでしたが、悪人等の慘酷な事は恰で虎か何かの様でした。

何も頓着なく「十字架に釘よ、十字架に釘よ」と叫はり、當時イエスが親切にされたにも拘らず、誰も彼も一緒になつて「十字架に釘よ」と叫びました。

ピラトは「汝等は、王を十字架に釘度いのか」と言ひますと、一同は聲を揃へて一齊に「其は私共の王とは認めない」と叫んだ其騒動は實に非常なものでした。遂にピラトも人々の言ふが儘にしようと思つて「曳て往つて、十字架に釘よ」と言ひますと、人々は大變喜びました。先づ第一に、兵卒はイエスの着て居られる美な衣服を脱して、再初に着て居られた衣と替へました。

ピラトがイエスを十字架に釘させた事は、誠に悪い事では有りませんか。イエスの罪の無い事は分明て居ながら、只人々の氣に入らうと思つて、殺させて了つたのです。

第二十八課 ユダの死 (太、二七、三一五)

此様騒動の間、ユダは何處に居たのでせう。悪人等は、約束の金で有つた、銀三十を呉れましたけれども、愉快いわけにはゆきませんでした。

「ア、私は、無辜師を殺して了つた。何と云ふ悪い事を爲たのだらう」と思ひますと、貰つた金も嬉しくは無く、又持つて居るのも嫌になりました。それも其筈です、其様悪い事をして得た金ですもの。

それからユダは、悪人等を捜しに行きましたが、丁度此時分には、前夜中イエスを罪にしやうと、相談をこらし、今は神様の家、即ち「殿」に居る處でした。

ユダは手に持つて來た、銀三十を悪人等の足許に投げて「私は大罪を犯しました」と言ひましたが、此人等の目的は、イエスさへ殺せば宜いのですから、誰も對手になりません。床の上に投げられた金を拾ひ上げて、其金で田を買つて了ひました。

それでユダは何處へ行きましたらう。野原の方へ、死に、往きました。赦免を願ひにイエスの許へは往かず、勝手に縊首つて死んで了ひました。

神様に自分の罪の赦免を願はないで、勝手に死んだのは、大變間違つた事をしたので

す。

第三十九課 十字架 其一 (路、二三〇、二六一三四)

ピラトがイエスを十字架に釘よ、と言ふのを聞いて、悪人等は大變に喜びました。

早速二本の大な材で十字架を作へ、イエスに負せてエルサレムを出て、在の方へと行きました。悪人等はやはり従って行きました。イエスは衰弱て居られる上に、十字架は大變重いのでしたから、殆んど歩行ぬ程で、途中で或男が代つて負て行つて呉れなかつたなら、倒れて了はれる處でした。

それでも、主イエスに對して、御氣の毒と思ふた者は、實に少數でした。

イエスを大變愛して居た若干人の婦人は、イエスの後から哭きながら従って行きました。此泣聲を聞かれて、イエスは願へり、誠に優しく「我爲に泣くな、汝等と汝等の子供の爲に泣け」と申されました。イエスは、エルサレムの民衆に、何時かは滅亡る

時の來る事を知つて居られたからです。

やがてイエスは一つの岳の上に来られました。兵卒等はイエスを十字架の上に仆して、手にも足にも釘をうち、十字架に釘て了しました。それから地に穴を掘て其中に十字架をたてたのです。

イエスの着て居られた衣服は、最早剝して了しましたが、十字架をたてると、四人の兵卒は其衣を四つに裂いて、各自一片づゝ取りました。けれども肌着は「縫目なく織つたものだから、裂くのは止さう」と云ひますと、其内の一人は其衣を持つて行つて、自分のものにして了しました。これで悪人等は、イエスの所持て居られた物を悉皆奪つて了つたわけです。

それでイエスは怒て居られたでせうか。

否、柔順こと恰で小羊の如でした。十字架の上に居られる間も、御父に祈られました。御手を舉る事は不能ませんでした。が、神様にお話なさる事は能ました。イエスは此惡

人等の爲に祈られました。言はるゝには
「父よ、此人等を赦免たまへ。彼等は自分の爲る事が、如何事で有るか、識ら無いので御座います」

第四十課 十字架 其二 (路二三。三五―四三)

ポンテオピラトは、イエスの十字架の上部に罪標を建て「此はユダヤ人の王なり」と書き付けました。

ユダヤ人とは誰ですか。

エルサレムに住居で居た人々がユダヤ人と云ふのでした。

此罪標を讀んで、悪人等は一同嘲笑ひ、首を振り、口を尖らかして「若し眞實に神の子ならば、十字架から下ろ」と云ひました。

イエスは下られたのでせうか。

それは何でも能るのでした。けれども罪人の爲に、十字架の上に居やうと決められたのです。

悪人等は「若し神様が眞實に愛されるなら、十字架の上などで、死なしはなさるまい」と言ひました。

けれども御父は、我等を救はせる爲に、御死なしになりました。

イエスの十字架の兩側には、盜賊が一人づゝ、矢張り十字架に釘られて居ましたが、一人の方はイエスを嘲笑て「若しお前さんが、眞實に神の子で有るなら、何故我等を救けませんか」と言ひました。

今一人の方は、自分の罪を悲しみ、又イエスを愛しました。

それで、今嘲笑た方の盜人に「我等は悪事をしたのだから、十字架に釘られるのも當然だ。けれどもイエスは全然善良人で有るのだ」と言ひ、又イエスに對つて「主よ、王となられました時は、何卒私の事を憶つて下さい」と申しました。

イエスは答へて「汝は今日、我と共に天國に在るで有らうぞ」と言はれて、此盗人の祈を御聞き入れになりました。それは、イエスは御自分を神の子で有ると信じる人全體を、救ふが爲に死なれたのだからです。

諸子方も、何日か天國に入つしやれば、其盗人に御會ひになりませう。

第四十一課

十字架

其二

(約、一九、二五—三〇。太、二七、四五—五四)

太、二七、

イエスの母のマリヤは十字架の傍に立つて居られました。我御子の死ぬのを見に来られたのです。無論一通の悲歎では有りません、見た丈で胸は裂ける様に感じたのです。

マリヤは嬰兒の際から、自分には親切に、一何つ不善はせず、然も神の子と知つて居る、此善良可愛い、御子の事ですから、非常に愛して居られたのです。それでイエスも我母の悲歎を見られて、誠に氣の毒に思はれましたが、丁度其時、ヨハ子も來て居

まして、マリヤの傍に立つて居ました。イエスは御自分は今、母を離れて行く處ですから、ヨハ子に世話をさせ度いと欲はれ、マリヤに對ひ「此が汝の子で有る」と言はれ、ヨハ子には「此が汝の母で有る」と言はれました。ヨハ子はイエスの仰しやつた意味が分明ましたから、マリヤを我の母として宅に連れ歸つて、共に住居しました。

イエスは母を愛され、死なれる時まで、母の事を思はれました。

苦痛は甚し、暑は烈しいので、イエスは「我渴く」と言はれますと、兵卒は海綿を酢に漬し、葦の先に束て呉れました。

イエスは其酢を僅嘗められて「事竟である」と言はれて死なれました。靈魂は仰父の許へ往きましたけれど、身体は猶十字架の上に在りました。

イエスの死なれたのは午後の三時でしたが、日暮まで十字架に釘られた儘でした。

イエスの死なれる前に、神様は暗黒になさいまして、地を震はせられましたから、人々恐慌がりました。それで死なれました時、或者は「此は誠に神の子に相違ない」と

言ひました。

或處にアダと云ふ小さい女の命が有りましたが、未だ口が宜く廻ら無い時分から、常時「イエスよ、私の代りにお死に下すつて有りがたう御座います」と言つた相です。

第四十二課 兵卒等 (約一九、三二—三七)

兵卒等は夜に成ら無いうちに、イエスと二人の盗人とを埋て了ふと思つて、死んで居るか如何か、見に来まして、一人の盗人を見ると未だ死んで居ませんから、脛を折つて殺して了ひ、又今一人を見ると、此も未だ死んで居ませんから、矢張脛を折りました。今度はイエスを見ますと、死んで居られましたから、脛を折りませんでした。併し一人の兵卒が、戈と云ふ先の尖つた長い棒を持つて来て、脅を刺さますと、血と水とが流出しました。ヨハ子は傍に立つて居て、此を見ました。

諸子は、前夜夕餐の時、葡萄酒を杯に注いで「此は我の血で、罪人の爲に流すので有

る」と仰しやつたのを、記憶て居ますか。

今、此通り血が流出たでは有りませんか。

今の戈で、脅に穴が開きました。脅の一つ、兩手に一つ宛、兩足にも一つ宛穴が出来て、額は刺で裂創だらけ、眼は多量の涙を流出し、皮膚からは血が浸み出て居ました。ア、諸子、イエスは神様が我等を赦免て下さる様にと、此様辛ひ苦痛を忍れたのです。

第二十三課 墓 (約一九、三八—四二。路、二三。五五—五六。太、二七。六〇)

イエスを愛して居つた富者が一人有りましたが、其人の名はヨセフと云ふのでした。

(マリヤの夫で無い、他のヨセフです) 此人は一つの園を持つて居まして、其中には墓が出来て居ました。此は多分、自分の死んだ時、其處に埋て貰ふと云ふ積で有つたのでせう。

併し此時ヨセフは「何卒して主イエスを、私の墓にお入れ申し度いものだ」と思ひま

した。其墓は誠に好い墓で、未だ誰も埋つては居ませんでした。

それからヨセフは、ポンテオ、ピラトの許へ行きまして「イエスの屍を頂かして下さい。十字架から取り下して、運て去つても宜しう御座いますか」と申しますと、ピラトは「宜しい」と云ひましたから、ヨセフは大喜びで、潔いな自色い帛布を買て来ました。如何するのだとお思ひですか。これはイエスを裹む爲です。それから香も買て来ました（好い匂のするものです）。それで数人々を連れて来て、イエスの手や足から釘を抜いて、屍を十字架から下しました。ヨセフは携て来た帛布で頭や腰を包み、香を塗抹つて、自分の園へと運ばせました。

園の中に磐と云ふ小高い場所が有つて、其磐には洞が有りましたが、一同は此暗い大い洞の中に這入て往つて、其處へイエスを單獨置て来ました。

これでイエスは休息れました。苦痛も無く、悲歎も無く、悪人等は最早傍には居ず、此静な墓の中に、主は平臥で居られるのです。

それで人々は大きな石を取つて、誰も中へ這入れ無い様に洞口を塞ぎましたから、最早獸類も鳥類も、主イエスに觸る事は不能ません。周圍には園一面に、樹木や草花が有つて、人間の眼には見えませんでした。天使等は其處に居て、主の番をして居ました。

イエスを愛して居た哀れな婦人等は如何したでせう。

此婦人等が、イエスの此處に置れるのを見たら、如何程哭た事でせう。

婦人等は、十字架から下されるのも見て居ました。それから此園に従いて来て、丁寧に墓の中に置れるのを見まして、相互に「もつと香を買て来て、好香の香膏を作へて主イエスに塗抹て上やうでは有りませんか」と云ひました。

ヨセフも香を塗抹りましたが婦人等はずと塗抹り度つたのです。それで一同は家へ歸つて、好い香膏を作へました。

第四十四課 復活

(可、一六〇一一六。路、二四〇三一〇。太、二八〇九、一〇)

イエスが死なれてから二日目の朝早く、憐れな婦人等は園に來ました。日もやがて昇らうとする頃ですから、其邊は未だ薄暗う御座いました。

手に香料を持つて歩行ながらも「如何してお墓へ這入りませう。入口には大い石が置いて有つて、其石が又大變に大いのですから、私等には逆も除けられますまい」と如何したら宜らうかと、種々心配して行きました。

すると、やつとお墓の處へ來て見ますと、石は除けて有りましたから、一同は非常に吃驚しました。

此は事によると、悪人等が來て、イエスの屍を盗んで往つたのでは有るまいか、と考へますと、大變悲しくなりました、先づ墓の内部を見ますと、イエスの姿は有りませぬ。其内氣が付いて見れば、二人の天使が自分等の側に立つて居ました。顔は日の如

に輝き、衣服は雪よりも白い位でした。

婦人等は、此天使を見ると戰慄しましたが、天使は優しく親切な調子で「駭くには及びません、我等は汝等がイエスを尋て居る事は知つて居ます。イエスは甦つて最早此處には居られません。先頃、十字架に釘られて後に、再甦ると言はれたのを記憶て居ませんか」と曰ひました。

それから「イエスを葬て有つた處へ往つて御觀なさい。そして急ぐ往つて、使徒等にイエスは甦つて、直に會れるとお告ひなさい」と曰ひました。

婦人等は大變喜んで、一生懸命に弟子等の許へ報告に行きました。すると此様して走けて行く途中、マア諸子、誰に會つたとお思ひです。誰あらう、イエスです。イエスは先日のような容体は無く、頬には最早涙の跡もなく、悉皆拭ひ去られて、十字架を負れた時の様に衰弱ても居られませんでした。最早疾はれる事も、再死なれる事も無くなつたのです。

此を見た婦人等の喜びは一通では有りません、一同地上に跪いて、去つて了れない様に足を抱て、主よ、神よと申しました。でも猶何だか恐しい様な気がして居ましたが、イエスは懼るなど仰しやつて「我の兄弟の許へ往つて、直に遇ふからと言へ」と申されました。誰の事を兄弟と仰しやつたのでせう。

それは弟子等の事です。イエスは、悪人等に捕へられた時、一同逃て了つた事も赦免になつたのです。

婦人等はイエスの仰しやつた通りに、弟子等の許へ急で往つて「我等は天使を見、又主イエスに御目に懸りました。主は歩行て居らつしやいます。貴殿等も直に御遇になりませうと、告ました。使徒等は一向に信じませんでした。

第四十五課 マグダラのマリア

(約、二〇。一一一九)

今迄に二人のマリアの事をお話しました。一人はイエスの母で、も一人はラザロの姉

妹でした併し猶一人マリアと云ふ人が有りました、此はマグダラのマリアと云ふのです。

處で此マリアは他の婦人等よりも、もつと早く墓に來まして、内部を見ましたけれども、其時には、天使は居ませんでした。それで、マリアは大急ぎで走歸つて來て、イエスが墓に在しやらない由を、ペテロとヨハ子に告せまして「どうも悪人等がイエスを盗んで去つて了つて、見付る事は不能なくはないかと心配します」と云ひましたから、ペテロもヨハ子も、一生懸命大急ぎで走出しましたが、ヨハ子の方が早やかつたので、墓へ先に着きましたから、屈身で覗いて見ますと、内部には桌布が置いて有りました。

其内ペテロも來まして、墓に這入りましたが、身体を包いた桌布も有り頭を包いた布は布で別にちやんと置いて有りました、やがてヨハ子も墓の内へ這入つて往きました。イエスの話された甦りの事を想起して「ア、皆眞實だ、イエスは甦つて墓を去られた

のだナ」と思ひました。

それからペテロとヨハ子は墓を出て、家に歸りましたが、天使にもイエスにも遇ひませんでした。

此間 マグダラのマリヤは何處に居たでせうしペテロもヨハ子も家へ歸つて了りましたが、只一人で墓の外部に起立て泣いて居ました。終に屈身で墓の内部を見ましたが、實に立派な光景でした。二人の天使が、一人はイエスの首の在つた處に又一人は、足の在つた處に、坐つて居ました。

天使はマリヤに「何故哭きますか」と言ひましたが、マリヤは猶哭きながら「誰か、主イエスを連れて了つて、見付りません」と言ひました。

此時後部から誰か「何故哭くか」と言ふ者が有りましたが、誰だか知らず、多分羣衆か何かだらうと思つて、若しお前さんがイエスを連れて去つたのなら、何處へ置いたか知らせて下さい、私がお連申して去つて了ひますから」と言ひますと、其人は「マリ

アよ」と言ひました。其聲で氣が付いて、願つて見ると、其はイエスでしたから、此様にも愛して居た主でも有り、師でも有るイエスを見た喜びは又格別でした、併しイエスは長く共に居らつしやる譯には行きませんでした。イエスは懐しい弟子等の許へ往つて、自分の甦つた事を話す様にと仰しやつて「我は直に天に在す我父の許へ昇くので有るが、先我の弟子等に會つて行かう」と仰しやいました。

マグダラのマリヤは使徒等の許へ來て話しますと、一同哭いて居ましたが、マリヤの言ふ事を信じませんでした。

マリヤはイエスを見に往つた事を喜びました。イエスが甦られてから、誰よりも先に御目に懸つたのは、此マリヤでした。

第四十六課 二人の友

(路、二四。一三一—四八)

婦人等がイエスを尋ねに往つたのは朝早くでしたが、其晩二人の善人は或田舎を歩行

て居ました。歩行ながらも、兩人はイエスの話をして居ました。甦られてから、未だ御目に懸らないので、復活の事は知りませんでした。それで十字架に釘られて死なれた話をして居たので、大變に沈んで居ました。

すると誰だか話しかける者が有りましたが、兩人共他人だと思つて居ました。でも大變親切な人の様でした。

其人は「何故哭くのか、何か大變悲しい話の様だねと、曰ひましたから、兩人は「左様です、悲しい話をして居るのです。お前さんはイエスの事を聞いた事が無いのですか、種々な不思議な事をなすつて、盲目や啞や病人を癒したり、神様の事を人々に教たりなすつて、人々も慕つて居たのですが、遂に十字架に釘られて了たのです。我等は神の聖子だと思つて居ましたが、此様死なれて見ると、左様で無かつたかも知れません、そして最早此限り御目も懸れ無いかも知れないのです」と曰ひました。

すると其親切な人は、兩人の哭くを見て氣の毒がり、種々と話を始めて、イエスは

矢張神の聖子で、人間を救ふ爲めに十字架に釘られたので、又甦つて御父の許へ歸るので有ると云ふ事を話しました。

此親切な人は他にもまだ種々言ひました。聖書の中の句なども悉皆知つて居て、兩人の知ら無い事を澤山話しました。それで兩人共喜んで聞いて居ましたが、其間は大して悲しくは有りませんでした。

やがて此田舎に在る兩人の家に着きますと、其人はすん／＼行き過ぎそうにしますから、兩人は「漸々暗くも成ります、何卒御這入下さい、我等と共に夕餐を食つて、此處に御宿りなさい。何卒かマア御這入下さい」と曰ひましたので、それではと云ふので、這入りました。一同で夕餐の準備のして有る部屋へ這入、三人は食卓を圍んで坐りますと、其人はパンを取つて裂き、神様に御祈を始めましたが、此時初めて兩人は、此知らない人と思つて居た人が誰で有たかを知りました。

「此は主だ」と兩人は叫びましたが、實際左様で有つたのです。それから主の方を見

ますと最早見えなくなりました。扉は開けられませんでしたが、居なくなつて了りました。

そこで兩人は、イエスの言はれた事を考へて見て「實に優しい事を仰しやつたでは無いか、種々話をなすつて、聖書に就いて種々意味など話された時には、我等の心が燃る様だつたでは無いか」と云ひました。

諸子、此人等は其夜睡たと思ひですか。

どうして中々睡られはしません。

「サア早く往つて、イエスに御目に懸つた事を弟子等に話さうでは無いか」と云ふので、夕餐も何も其儘にして、夜路を急いで行きまして、直にエルサレムに着きました。使徒等は一室を閉塞して一同一緒に這入つて居ました悪人等が這入れない様にと扉に錠を下して居りましたが、今来た善い人々は入れました。一同丁度夕餐の處でした。

「我等はイエスに御目に懸りました。我等と共に歩行て話をされたのですが、夕餐

の席でパンを裂いて御父に感謝をされる迄は、イエスとは氣が付きませんでした」と曰ひますと使徒等は「婦人等も御目に懸つた」と曰ひ、ペテロも御目に懸つたのです」と曰ひました。處が一同で夕餐を食べて、イエスの事を話して居ましたが偶然見れば、イエスは室の中央に起立居られました。扉には錠が下りて居ましたけれど、這入て來られたのです。

弟子等の心地は如何でしたらう。一同懼れて、眞のイエスとは信じられませんでしたが。イエスは親切な調子で「何故懼がるか。我の手や足を御覽、我では無いか」と曰はれて、手と足の釘の跡と、鎗で穿いた脊の穴とを御見せになりましたので、弟子等は漸々自分等の愛する師で有る事を知りまして、非常に喜びました。何しろイエスが死なれてからは、悲嘆いてばかり居たのですから、其喜は又格別でした。一同逃て了つたのも赦れて、其事に付いては何とも仰しやらず、ペテロのした事もお赦しになりました。それはペテロが御自身を愛して居る事も、亦後悔して居る事も御存じで有たか

らです。
使徒等は余り、吃驚して、イエスを見ても未だ甦られた事を信じきれませんでした。
イエスは一同が未だ能く信じないのを知つて「何か食物が有るか」と仰しやいますと、弟子等は其處に在つた魚の一片と蜜を差上りました。イエスは其を取つて、弟子等が御自分の眞實に甦られた事を信じる様に、食始められました。それから、少時經過て話をされて、御身分の死なれた譯や、これから一同の爲に祈しに御父の許へ歸られるのだと云ふ事を話されました。
此夜は、憐れな使徒等にとつては、誠に楽しい晩でした。イエスが往時園で悲しんで居られた際の如な悲しい夜では有りません、悲歎は去り、既再苦痛を感じられる事は無くなつたのです。

第四十七課 トマス

(約、二〇。二四—三一)

諸子、使徒等が晩になつて、イエスを見た事は御聞きになりましたが、其時居なかつた弟子が一人有りました、名はトマスと云ふのでした。如何して居なかつたのか、それは分明ません。

それで他の弟子等は、トマスを見ると直に、我等はイエスに御目に懸つた。日曜日の晩、我等が一緒に坐て居る室内に這入て來られて話をされた。確にイエスで有つた、手と足の釘の跡と、脅の鎗の穴迄見せられたのだから」と曰ひましたが、トマスは弟子等の言ふ事も信じませんで「否イエスを見たのでは有るまい。十字架の上で死なれたのなもの。我の指を其釘跡に入れ、又脅の穴に手を入れて見無い内は、私には決して信じられない」と曰ひました。

トマスが此様事を言つたのは、大變間違つた事でした。イエスが甦ると確に言はれた事を記憶して居る筈です。

それでトマスには見えませんでした。イエスは此言語を聞いて了はれました。此は

かりでは有りませんが、イエスは神様なので、常時も使徒等と共に居らして、一同の言ふ事は悉皆聞いて了れたのです。

次の日曜日晩も、使徒等は一同一室に共に居ました。今度はトマスも居ました。扉は矢張悪人等の這入らない様に錠が下して有りましたが、イエスの御這入りになられる事は一同知つて居ました。それでイエスは實際這入て来られました。一同が見た時は室の中央に起立して居られました、親切な聲で、「爾曹安かれ」と仰しやいまして、今度はトマスに「サア此處へ来て、我的手の釘の跡に汝の指を入れて見よ。それから脊の穴も此處に有るから、汝の手を入れて見ろ」と仰しやいましたので、トマスはイエスが、自分の間違た事を言つたのを御聞きになつた事を知りまして、恥づかしく思ひ、後悔しました。

眞實イエスで有るのを見て「我主よ、我神よ」と叫びますと、イエスは「汝は見たから信じるのだ。見ないで信する者は福で有る」と仰しやいました。

イエスはトマスが眞實に御自身を愛して居るのを御存じでしたから、云つた言語の悪かつた事も御赦しになりました。

第四十八課 晝餐 (約、二一〇・一一一九)

イエスは弟子等に、ズツト遠い田舎の方へ往く様にと仰しやつて「再来て遇はう」と申されました。

それで弟子等はエルサレムを出て田舎に行き自分等が晝日住居た事の有る海邊へ来ました。此處には一同船を所持居りましたから、船の中に居た時は屢々魚を捕りくしました。

或夜ペテロは他の弟子等に「私は漁に行つて来ます」と言ひますと、一同「我等も一緒に行きませうと、言ひますので、一同一の船に乗つて出まして、終夜盡力りましたけれど、何魚一つ漁れません。それで朝に成りますと一同疲勞て飢ゑて来りました。

鳥渡上を向いて見ますと、水際に誰だか起て居ましたが、弟子等には誰だか分解せ
んでした。

すると其人は聲を擧げて「小供等よ、何か食物が有るか」と云ひましたが、可愛相に
一同終夜かゝつても、何魚一つ捕れなかつたのですから「否有りません」と答へまし
たが、其人は「網を船の右側に撒て、そうすると魚が捕れる」と申しました。

それから一同其通りに網を撒ましたら水から曳揚され無い程に、魚が澤山獲れま
した。

此を見てヨハ子は、其人が誰だか分解ましてペテロに「是は主だ」と云ひますと、ペ
テロは大喜びで、忽ち水の中に飛び込んで、誰よりも先に、イエスの許まで泳いで行
きました。他の弟子等は直後から、網や魚を乗せて船で來ました。

イエスは一同が疲勞て飢ゑて居る事を御存じでした。
水際には火が有つて、其上には魚とパンが懸つて居ました。飢ゑて居た弟子等に、此

様して食物を下さるとは、實に御親切な事では有りませんか。

イエスは「今捕つた魚を少し携て來い」と仰しやいましたから、ペテロは船に行つて
網を持擧しましたが、中は大な魚で盈溢で、百五十三尾も這入て居ました。

此はイエスがなすつた中でも、大きな奇蹟でした。

それからイエスは弟子等に「來て食よ」と仰しやいますから、一同共に坐りました。
イエスはパンを取つて各自に下さり、次に魚を取て矢張各自に下さいました。

これで使徒等は、自分等を養つて居る方は、確にイエスだと知得ました。死なれた前
も屢々此様風にして食事をしましたが、甦られた今、又共に食事をしたのです。併し
そう長くは此世に在にならない事は、一同知つて居りました。

食事が済むと、イエスはペテロに「汝は我を愛するか」と仰しやいました。ペテロは
諾愛します。主よ、私が貴下を愛する事は御存じです」と言ひますと、イエスは「我
羔を牧へ」と仰しやいました。其意味は、我を愛させる様に他人に教よ、又我が人

々の爲に死んだ事を、行つて人々に話せ、といふ事です。諸子方の様な子供はキリストの羔で、此様してキリストの御話をして居るのは、諸子を牧つて居るのです。これは諸子の靈魂を養ふので、其食物はイエスの愛です。

ペテロは眞實にイエスを愛して居ましたし、其愛して居た事はイエスも御存じでしたけれど、再「汝は我を愛するか」と仰しやいました。ペテロは再「主よ、私が愛する事は、貴下は御存じです」と申しますと「私の羊を牧」と仰しやいました。

イエスはほ同事を三次も繰り返して「私は我を愛するか」と聞かれました。

それでペテロは、三次も同事を聞かれましたから、此は自分の云ふ事をイエスが御信じに成らないのかしらと愛しく思ひまして「主よ、貴下は何事でも御存じです。私が貴下を愛する事は御存じです」と言ひますと、イエスは再「我の羊を牧へ」と仰しやいました。

ペテロがイエスを愛するなら、仰しやつた通りに人々を教へて行くでせう。

諸子はイエスをお愛しになりますか。若しイエスが「汝は我を愛するか」と仰しやつたら、何とお答へなさるお積りですか「私の心の中を御覽下さい、貴下をお愛し申して居るのが了解ませう」と仰しやれますか。若し諸子が眞實にイエスを御愛しになるなら、終 日 正直に、親切に、柔和して、イエスの御氣に入る様にお務めにならないければなりません。

何故イエスは、其様に幾度も御自分を愛するか如何かと、ペテロに御聞きなつたのでせう。又何故三度御繰り返しになつたのでせう。それはペテロが、イエスを知らないで、三度言つたからです。それでイエスは矢張三度愛すると言はせ度つたのでした。それから、ペテロが老年になつてから、如何な事が起るか云ふ事を話してお聞かせになるには「汝は壯年時代には勝手自由に其處邊を歩行まはつたけれど、老年て來ると、或者が汝を捕へて、汝の手を引き延ばし、行き度く無い場所に曳れて往つて了ふ」と云ふことでありました。

仰しやつた意味は、十字架に釘けられる、と云ふ事にして、或者が、丁度イエスにした如に、ペテロの手を十字架の上に引き延ばすと云ふ事です。ペテロはイエスを愛して居ましたから、悪人等は十字架に釘るでせうか、ペテロは最早決してイエスを知らないとは申しますまい。

ペテロも今は、前の様に不遜では居りませんから、喜んで自分が罪を犯さぬ様にと、神様に御祈をするでせう。

第四十九課 昇天

(太、二八。一六―二〇。路、二四。四六―五二。徒一。四―一四)

イエスは甦られてから、屢々來つて弟子等に面會ひになりましたが、前の如に常時共には住居になりませんでした。

御自分は直に御父の許へ行かれるのだと云ふ事をお話になつて「我が行つて了つた後は、一同は人々に我の事を話して聞かさなければ不可ない。又我を十字架に釘た人々

にも、我は只後悔さへすれば赦免と云つて聞かさなければ不可ない。それから御父の御約束が有つたのだから聖靈が天から降下するから、其時迄エルサレムで待つて居れ。汝等は見えないでも、常時我は汝等と共に居て、何時か再返つて來る」と仰しやいました。

それで弟子等は、何時御返りになるかを伺ひましたが、何時と云ふ事は御話しになりませんでした。

或日イエスが弟子等と共に一山の上を歩行かれました、共にお祈をなさり、御手を擧げて一同を祝福なさいましたが、丁度其時イエスは天に擧げられ、終には雲が隠して了つて、使徒等の眼にも見えなく成りました。それでも一同は見て居ますと、雲は漸々高い處に昇つて行つて、やがて最早其雲も見えなくなりましたが、猶見て居ますと、誰だか聲を掛ける者が有りますから、誰かと思つて見ますと一同の傍には天使が二人立つて居ました。輝つた白衣を着て居ました「何故汝等は其様に何時迄も、天の方を

仰て居るので、イエスは「再何時か来られます」と言ひました。それから使徒等はエルサレムに戻つて行つて、聖靈の降下のを待つて居りました。

最早イエスが居なくなられたのですから、一同沈んで居たらうと、諸子はお思ひでせうが中々左様で有りません、イエスの行かれたのは、永遠御一緒に住まふ爲めに、自分等の住處を準備しに行つたと知つて居りましたから大變喜んで居りました。

第五十課

獄中のペテロ

(徒、二、一二〇—一二三)

イエスが御父の許へ御歸りになつた時、何を遣すと御約束なさいましたか。聖靈です。それで御約束の通り、其聖靈を御遣しになつたので、以後使徒等は一般の悪は人々にイエスの事を御話し始めました。

「汝等は神の聖子を十字架に釘たが、今は懲られて、御父の聖座に坐られに行かれた、併し汝等を赦免て、聖靈を興へられる思召で有る」と言つて聞かしました。

人々の中には、自分等がイエスに爲た事を後悔して、神様に御赦免を願つた者も有りましたが、又一方には、少しも悪いと思はないで却つて使徒等を殺さうとした人等も有りました。

悪い王は劍でヤコブの首を切り、それからペテロは直に殺して了ふ積で、牢に入れました。諸子は牢獄を御覽になつた事が有りますか。周圍中頑丈な扉だの、格子だの、壁だので包圍れた、暗い場所です。

兵卒等はペテロを捕へて、手や足に鎖をつけ、牢獄の扉には錠を下し、誰も他の人は這入ら無い様に、扉口には人が坐つた居りました。

ペテロの友達は大變に悲しみましたけれど、出して遣る事は出来ませんでした。併し此人等の能る事が一つ有りました。それはペテロを救つて下さる様に神様に御祈する事です。それで一同は夜も晝も一生懸命に神様に祈禱をしました。

悪い王は「明日はペテロを殺して了ふ」と申しましたが、神様は殺させる思召で有り

ませんでしたから、美麗天使を一人御遣はしになつて、ペテロを牢から出させる様に
なさいました。天使は牢獄の中へでも、扉を開けないで這入れます。
天使が牢へ来たのは夜でした。ペテロは睡つて居まして、兩側には一人宛兵卒が居て、
ペテロは此二人に鎖で縛がれて居るのでした。牢獄の中で、兵卒は近邊に居るし、手
は鎖に縛がれて、諸子は睡るとしたら如何ですか。それでもペテロは、神様が自等を
愛して居られる事も、亦自分の安全な事も知つて居ました。
扱天使は來ましたが、牢の中は暗闇でした。ペテロは天使が見えませんでしたらうが。
天使は太陽の様に輝いて衣を着て居て、牢の中を照耀しましたから、見えました。
天使はペテロの脇に觸つて起しましたが、鎖はペテロの手から脱れて了ひました。
それからペテロに自分の衣服を着ると云ひますから、其通にしますと「従て來い」と
言ひまして、天使は先に立て行きますので、ペテロは従いて行つて、遂牢を出て了ひ
ました。けれども扉口に居た人々はペテロの出で行くのを見ませんでした。神様が睡

かして了はれたからです。

ペテロは非常に驚いて、何か夢でも見て居るので、眞實に天使を見て居るのでは有る
まいと思ひました。

やがてペテロは鐵門に來ましたが、確りと錠が下て居ました。けれども天使は別に錠
を出して開けなごしません、扉の方から自然に開いて、ペテロと天使を通しました。
扱二人は嚮に出ましたが、天使は猶ズン／＼行きますから、ペテロも後から従て行き
ました。けれども何方も一言も口は利きませんでした。

人民は一同睡つて居て、輝いた天使が嚮を歩行て居るとは知りませんでした。天使は
嚮を只一つ通過た計りで、天に歸つて了ひましたから、ペテロは暗闇の嚮中に只單獨
立たざり、暫時は考て居ました。「何たる不思議な事が起つたのだらう。私は牢の中に
入れられて居ただけれど、神様は天使を御遣しになつて、私を出して下すつたのだ。
王は明日私を殺す積だが、最早左様はいかない」

ペテロは勿論神様の慈仁を感謝したでせう。ペテロは終夜齋中には居す、自分の知つて居る善い婦人の許に往つて、扉を叩きました。家の中の人には睡つて居たでせうか。夜中でしたが、一同醒て居ました。何故でせう。

此善婦人は、王がペテロを明日殺すと云ふ事を聞きましたので、自分の友達と共にペテロの爲に祈禱をして居ますと、扉を叩くのが聞きました。夜半に扉を叩くとは不思議な事です、併し誰もペテロが來様とは豫想ませんでした。

ローダと云ふ下婢が扉の許迄來ましたけれど、ひよつとして悪人等が此家の主婦や其友達を殺しに來たのでは無いかしら、と思つて開けるのを恐怖で、内部から誰だかを知らうと、先扉の許で窺ひましたが、ペテロの聲を聞いた時の其喜は實に大したものでした。此女はペテロの聲を知つて居ましたから「ペテロ様ですか」と尋か無いでも、確に左様と知りました。それで餘り驚いて、扉を開ける事も忘れて、大急で奥に走込み、自分の主婦や其處に居た使徒等に「ペテロ様が門の許に立つて居ます」と云ひま

したけれど、一同は「なにペテロの筈は無い、牢の中に入れられて居るのだもの」と言ひましたが、下婢は「いえ確にペテロ様です」と言ひました。

此様して一同で兎や角と言ひ合つて居る内もペテロは外部に立つて、誰も扉を開けて呉れませんから、扉を叩いて居ました。其内一同は出て來て、扉を開けて見ると、矢張眞實にペテロでしたから、大變に驚いて

「マア如何して牢から出て來ましたか」と言ひますと、ペテロは手を搖して一同を制し、自分が牢から出て來た次第を、靜にして聞く様にさせました。

「神様は天使を御遣しになつて、其天使が私を牢から伴出して呉れたのです。私はこれから他處へ行つて了はなければならぬから、有つた次第を他の友達に告せて下さい」と言つて、出て行きました。悪い人々に知れない處に隠れて了ひました。牢に番をして居た兵卒は、朝になつてペテロの居ないのに氣が付いた時、如何考へた

と、諸子はお思ひですか。

繋いで有つた鎖は有りながら、ペテロが居無いですから、一同驚懼して了りました。何しろ、門を見れば整然銃が下りて居るのです、如何して牢を脱け出したか、一向原因が理解できません。

其内に王からペテロのお呼び出しが有りました。此日はペテロの殺される日で有つて、エルサレムの悪人等一同これを待ち構へて居たのです。それで王様のお使は「ペテロは何處に居るか、曳き出しなさい」と言ひました。

兵卒等は「ペテロは何處に居るか分りません、居無く成りました」と答へました。

お使は歸つて、ペテロが牢に居無い事を、王様に申上りますと、王様は大變な御立腹で「兵卒共を此處へ曳きて來い、皆睡つて了つたに違ひない」と申されました。

それで兵卒等は曳き出されましたが、如何してペテロが逃げて了つたかと云ふ事に就ては、一向王様にお答が不能ません。それは神様が天使にペテロを伴出させられた間

一同を睡らしてお置きに成つたからです。兎に角王の立腹は大變なもので「此兵卒等は死罪にせねば成らん」と云ふ事でした。

何といふ兇惡王様でせう。此人は悪い事をするのが好で有つたので、大變不遜で居て、神様や神様に従つて居る人を、大變嫌つて居まして、常時疝癪を起して、只自分の好き勝手に計りして居ましたが、遂神様は天使をお遣しに成つて、御殺させに成りましたから、死んで了りました。

神様は、ペテロの様に御自分を愛する者には、誰にでも救助を御遣りになります。矢張天の使を御遣しに成りますけれど、私等は罪深い者達ですから、逆も私等の眼には見え無い丈けです。

第五十一課 ヨハ子

(黙、一〇九—一九〇、四〇—一五〇、二二〇)

十二人の使徒等は、終には大概悪い人等に殺されて了りました。ペテロも老年に成つ

てから、イエスを愛して居たので、悪人等が十字架に釘て了ひましたが、今では白衣を着、涙は拭はれて、イエスと御共に樂園に在るのです、愛する主イエスは常時御共ですから、如何にか楽しい事でせう。

ヨハ子は大層な老年になる迄生て居ましたが、或悪い王に捕つて、友達から離れた、遠い國の周圍中水で逃げられ無い様な土地へ遣られて了ひました。

それでは、ヨハ子は楽しくなかつたでせうか。否それでも楽しんで居ました。天の父や聖子イエスの事を考へて、楽しんで居たのです。

或日曜日、神様の事を考へて居ますと、笳の如な大な聲が、自身の後にしましたから、誰かと思つて振り返つて見ますと、マア諸子、誰で有つたと思ひです。

實に主イエスで、輝り赫耀いて、天から降下されたのです。ヨハネはこれを見て、口も言けず、起つて居る事と不能ませんでした。全く懼れたので、恰で死んだ様に、地上に仆れました。けれどもイエスは手を按いて「懼れるに及ばぬ、我は生て居るもの

で、前に死んだ事が有るのだ、視よ、我は世々窮なく生るので有る」と仰しやいました。

ヨハ子は神様の坐られる聖座を見ましたが、同周圍には虹が有つて、多數の寶座があり、其上には、白衣を着き、首には金の冕を戴つた人等が坐つて居ました。此人等は冕を脱つて、聖座の前に投げ、神の羔なるイエスを讃めました。

ヨハ子は又、算へ盡れない程多數の天使等が、聖座の周圍に立つて、羔に讚美を唱つて居るのを見ました。

併しヨハ子が見た天上の種々なもの、内で、實に神様御自身程榮光有るものは有りませんでした。

天には太陽も無く、月も蠟燭も洋燈も有りませんけれども、神様は太陽よりもつと輝かれますから、常時明いのです。又悉皆の天使は神様の讚美を唱ふのですから、琴の音や美聲の唱歌が絶へず聞えて居ます。

ヨハ子は見たり聞いたりした事の余り稀有なのに驚嘆いて、それを見せ呉れた天使の足許に俯伏しましたが、天使は猶も語を續けて、イエスは直に世の審判の爲めに、天から降下られ、心の中に神様の聖語の在る人々を入れる様に、天國の門を開かれる併し悪い事を爲るものは、閉め出されるで有らう」と申しました。

イエスを愛して居る人々は、一同再雲に乗て來られる事を欲みます。

諸子は如何ですか。

「其如に主イエスよ、お出下さい」と仰しやるかも知れませんね。

私は、諸子が死なれたら、靈魂はイエスの許へ往つて、イエスが再度御出になる時、共に御伴れに成る様にし度と思ひます。

ヨハ子は自分が見た天の中のものを、一つの書物に書きましたが、それは悉皆聖書の中に在ります。ヨハ子も今は樂園にイエスと共に居て天使等と共に、琴を弾いたり、歌を唱つたりして居るのですけれども、再度イエスが雲に乗て來られる時は、共に來

るでせう。

それから諸子、今迄御話した十二の使徒等は、此通り優れた、偉大人々なので、此人等の事を申します時は「聖」と云ふ字を附けて「聖ペテロ、聖ヨハネ」と云ふ様に申して、尊敬ぶのです。

(完)

明治四十年一月廿五日發行

曉天
(定價金廿五錢)

堀田達治

發行人 堀田達治

東京市銀座四丁目一番地

印刷人 ゼー、エル、カウエン

東京市銀座四丁目一番地

發行所 教文館

東京市銀座四丁目一番地

印刷所 教文館印刷所

東京市銀座四丁目一番地



不許複製

258
3
288

11
88

020692-000-1

特18-460

暁天

堀田 達治/訳

M41

ABI-0509

